

SUPPLEMENT TO GENES GENET.SYST.(2006)81(4) August 2006

GSJ コミュニケーションズ

PROCEEDINGS OF THE SOCIETY

特別寄稿 —— 第78回大会総会に寄せて

「学問と科学者について」

浅島 誠

「科学革命としてのヒトゲノム解読： その科学的・社会的意味」

米本昌平

2006年度日本遺伝学会木原賞・奨励賞受賞者紹介
国内名誉会員候補者紹介

2005年度総会プログラムおよび
報告・協議資料集

本会
記事

- ・BP賞特集号・投稿規定
- ・著作権処理について
- ・科学者の行動規範（暫定版）等に関する調査と回答
- ・会長日々

GENETICS SOCIETY OF JAPAN (GSJ)

◆創立1920年◆

日本遺伝学会

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/gsj3/index.html>

2006年度日本遺伝学会総会特集号

目 次

頁

	1. 日本遺伝学会第78回大会総会 総会次第	3
	2. 特別寄稿 学問と科学者について 浅島 誠	4
	科学革命としてのヒトゲノム解読：その科学的・社会的意味 米本昌平	6
	3. 日本遺伝学会木原賞（第78回大会）受賞者紹介 岡田典弘会員	8
	4. 日本遺伝学会奨励賞（2006年度）受賞者紹介 佐渡 敬会員	10
	鈴木善幸会員	12
	5. 日本遺伝学会国内名誉会員候補者紹介 三浦謹一郎会員	14
	6. 日本遺伝学会第78回大会総会資料	
	1) 2006年度役員名簿	15
	2) 学術賞・研究助成等審査状況	16
	（参照：学会推薦学術賞・研究助成年間スケジュール）	
	3) 2013年国際遺伝学大会開催招致趣意書	16
	4) 会員数	17
	5) 2006年度中間報告	17
	6) 2005年度決算報告書	18
	7) 2007年度予算案	19
	8) GGS 編集状況について	19
	9) 日本遺伝学会大会開催地暦年表	20
	10) 生物科学学会連合連絡会議（第16回）	21
	11) 遺伝学談話会記録	22
	12) 協力委員会	23
	13) 2007・2008年度会長・評議員選挙結果： 会長，評議員，選挙管理委員会名簿，地区別投票動態表	23
	14) 外国名誉会員および国内名誉会員名簿	24
	15) 木原賞，奨励賞受賞者一覧	25
	16) 日本遺伝学会歴代会長	28
	7. 日本遺伝学会規約集	
	1) 会則	29
	2) 会長及び評議員選挙に関するおぼえがき	29
	3) 日本遺伝学会特別功労賞内規	30
	4) 日本遺伝学会学会賞および奨励賞に関する規定	30
	8. 本会記事	
	1) 著作権処理について	33
	2) 科学者の行動規範（暫定版）等に関する調査	34
	3) BP 賞特集号「若手研究者が語る21世紀の遺伝学V」投稿規定	35
	4) 会長日々	36
	5) 会員異動	37
	博士研究員募集：07年度情報・システム研究機構国立遺伝学研究所	32

編集まえがき

GSJ コミュニケーションズ81 (4) は、つくば大会総会の報告・協議資料を特集しています。学会のデータブックになることを期待しています。第78回遺伝学会大会において「科学と社会」または「生命倫理」にかんする講演会を当初、私は構想していましたが時間的な調整が困難と分かり、この会員交流誌に特別寄稿の執筆依頼を致しました。幸いに浅島 誠 東大教授と米本昌平科学技術文明研究所所長お二人ともご執筆を快諾され、本冊子に掲載出来ました。この場をお借りしまして、感謝申し上げます。生命倫理のテーマは遺伝学会が率先して問わなければならない課題であろうと思います。浅島教授は現在学術会議副会長として科学者の行動倫理についての提言をとりまとめる責任ある立場におられます。米本先生は、生命倫理に関する多くの著書を出され、その比較政策分析と歴史分析に軸を置いた論陣には目を見張る思いがします。「人は必ず一生の間に鏡に映る自分の姿を見る」という言葉があります。学会もまた同じであろうと思います。今後、遺伝学会に、このテーマに取り組む常置委員会が発足することを切望して止みません。人体を管理するとはどういうことか、両氏が問う問題に私たちはどう答えるか、これからでも決して遅すぎはしない。積み重ねる努力が大切であると思います。（石和貞男）

日本遺伝学会第78回大会総会

日 時 2006年 9 月26日 (火) 17時～18時
場 所 つくば国際会議場エポカル中ホール 300

総会次第 (議長ならびに副議長選出 議長代行 城石俊彦集会企画幹事)

- | | | |
|--------------------------------|-----------|-------|
| 1 大会委員長挨拶 | 委員長 | 小幡 裕一 |
| 2 日本遺伝学会会長挨拶並びに報告 | 会長 | 石和 貞男 |
| 3 報 告 | | |
| a 幹事報告 | 国内庶務幹事 | 田嶋 文生 |
| | 渉外庶務幹事 | 福井 希一 |
| | 会計幹事 | 斎藤 成也 |
| | 編集幹事 | 遠藤 隆 |
| | 企画・集会幹事 | 城石 俊彦 |
| | 将来計画幹事 | 高畑 尚之 |
| | その他 | |
| b 第20期学術会議について | 学術会議会員 | 小原 雄治 |
| c 学会賞選考委員会報告 | 委員長 | 石和 貞男 |
| d 遺伝学の教育と普及に関する特別
委員会報告 | 委員長 | 武部 啓 |
| e 選挙管理委員会報告 | 委員長 | 上田 龍 |
| f 生物科学学会連合報告 | 委員 | 城石 俊彦 |
| g その他 (2007/2008年度日本遺伝学会会長・挨拶) | | |
| 4 議 事 | | |
| a 2005年度決算 | 会計幹事 | 斎藤 成也 |
| | 会計監査 | 荒木 弘之 |
| b 2007年度予算案 | 会計幹事 | 斎藤 成也 |
| c 第80回大会について | 企画・集会幹事 | 城石 俊彦 |
| d 国内名誉会員の推薦について | 会長 | 石和 貞男 |
| e その他 | | |
| 5 次期 (第79回) 大会委員長挨拶 | 第79回大会委員長 | 香川 弘昭 |
| 日本遺伝学会賞授与式 | 会長 | 石和 貞男 |
| 木原賞・奨励賞 | | |

学問と科学者について



東京大学大学院教授
日本学術会議副会長

浅島 誠

学問は人間の本質的な知的
好奇心や冒険心を育て、自由
に考え、実行する、本来楽し
く、また魅力ある分野である。
しかしながらその過程や全て
の科学者において自由に学問
ができ、自分の知的好奇心に
沿って行動することができる
かという、むしろいつの時
代でも多くの人にとって、本
来の学問の在り方とは異なっ
た結果となっている。

それは科学が発達、発展し
た現状においてもしかりであ

る。私は生物学をやっているので、各生物が長い間、生殖を繰り返
し、子孫を残し、現存している各種 species の持っているナチュラ
ル・ヒストリーの面白さと奥深さ、美しさに常に魅力を感じている。
それはマクロな各生物種の形から、遺伝子の発現機構のミクロなレ
ベルまで、知れば知るほど、そのメカニズムや形の美しさにひかれ
る。まさに生物は芸術品であると感じている。

ところが、最近、科学が発達し、発展していくと、生物の研究に
も大きな変化が起きている。多くの生物のゲノムが解読され、それ
らはゲノム情報として、世界中をとびまわっている。そして、それ
らは人間そのものの在り方まで根源的に向かうところまできている。
一方、生命科学の発展は科学者の競争をさらに熾烈なものとし、知

的財産と同時に、プライオリティをめぐる論文で競争となっている。国もライフサイエンスにかなりの予算を投資しているが、今の時代の研究者にとってその予算額は少ないし、予算獲得が非常に厳しい状態になっている。科学者の研究業績も本来のオリジナリティーやその研究の質の本質で評価されるよりも **journal** の **IF** (**impact factor**) や **citation index** で評価する傾向が強いので、勢い、いわゆる商業化した **IF** の高い **journal** に投稿する傾向が高くなっている。特に国立大学の法人化後、交付金の減少によって研究資金の配分は激烈になっている。競争的資金の獲得に若い人も奔走している。最近、私は日本学術会議で「科学者の行動規範についての検討委員会」の委員長をさせられているが、分野間の差こそあれ、大なり、小なり研究者にとって大きな問題となっている。捏造、盗作、剽窃などの不正行為は科学者として行ってはならないことはあたりまえです。又そのような事の他に研究費の不正経理、研究資源の配分のあり方、利益相反の問題など、科学者は今、世間からも厳しく問われていると思います。科学技術立国という国の大指針があるにもかかわらず、若い人も含めて本当に研究や学問をやりたい人に予算は充分ではない。科学研究費は今の2～3倍にして、もっと、公募枠の割合を多くし、また今のような2～3年の補助ではなく、5～7年くらいのものを増やしてじっくりと研究できるシステムづくりも必要である。国際競争力と競争的資金の獲得のために研究や学問の方向性や質まで変化させられてきている。これで本当に良いのか、今、大きな問題として考えなくてはならない。日本の大学にあった良き伝統や学問分野も近年、なくなってきた。新しく変わったことによるメリットと失ったデメリットをきちんと再点検し、これからはビジョンや哲学をもった改革が必要だと痛感しています。

国民から信頼される科学者コミュニティと若い次世代に科学する喜びと楽しさを与える場を経験したり、見せたりするのが必要となってきました。そこにはヒトと社会と教育のあり方をもう一度、考え直す必要があると思っています。“学”と“科学”の復権です。ゆっくりと物事を考え、長い間の試行錯誤の中から思いもよらない大きな発見が見つかると思うのです。

Professor: Department of Life Sciences (Biology)
Graduate School of Arts and Sciences
The University of Tokyo
3-8-1 Komaba, Meguro-ku, Tokyo 153-8902, JAPAN

科学革命としてのヒトゲノム解読： その科学的・社会的意味



科学技術文明研究所
米本 昌平

ヒトゲノム計画は、生命科学では破格の大規模な国際共同研究として、1990年に開始され、2003年にその全解読は終了した。この研究プロジェクトが画期的であることはよく力説されるが、それは科学論から見ても、真性の科学革命であった。

現在、世界中に流布しているヒトゲノム解読の意義についての説明は、メンデル学説再発見以来の遺伝学説史をなぞるものが大半である。しかし、20世紀遺伝学から21世紀ゲノム学への移行は、方法論的に二つの点で革命的性格をもつ、パラダイム・チェンジであった。第一は、20世紀遺伝学にとってほぼ唯一の手段が交配実験であったのに対して、21世紀ゲノム学では遺伝情報が直接解読されることが普通になった。第二に、ヒトゲノム計画は、それまでの遺伝研究では唯一、交配実験ができなかった人間のゲノムを真っ先に解読の対象としたことである。

20世紀遺伝学は、突然変異など、特徴ある表現型の個体に的を絞り、その間で交配を繰り返し、責任遺伝子の位置を染色体上に同定することをその主目的としてきた。そこで唯一操作可能なのは、目の前にある表現型としての個体であり、遺伝型は仮説な存在に近いものであった。分子生物学の成立によって遺伝のメカニズムが分子レベルで解明され、研究のスタイルは、シャーレからシャーレへ株を植え継ぐ、スマートな実験室内操作に変わったが、それが交配実験であることには変わりなかった。

ところが1990年代末に、キャピラリー型のDNA自動解読装置が商品化

され、遺伝情報の自動解読という20世紀遺伝学の夢はあっさり実現してしまった。これ以降、21世紀の遺伝研究では、遺伝型であるDNAの配列情報の方が、先行して大量にコンピュータ内に蓄積するのが普通のことになり、表現型から遺伝型へと肉薄する従来の遺伝学的方法から、遺伝型のゲノム情報が先行して入手されている「逆遺伝学的手法」が全面展開する、方法論上の革命がもたらされたのである。データとしての性格も遺伝型と表現型との間で逆転現象が起こった。遺伝型であるゲノム配列は、いったん解読されてしまえば一生普遍の、編集が容易なハードデータとなり、これと比べて表現型は環境要因によって変わりうる不安定な位置のものとなった。

しかもヒトゲノム計画が、人間のゲノムを真っ先に読むものであったから、他の生物に先んじて人間がゲノム研究の対象の中心に据えられることになった。ポストゲノムの時代の人類遺伝研究では、遺伝型である大量のゲノム情報と、表現型に当たる、人間集団が一生のうちに表わすさまざまな生理学的・医学的情報の集塊を同時にコンピュータに導入して、両者間に統計学的連関を見つけるのが、主な研究方法となった。このため日常診療と遺伝研究との境目がなくなり、現場の医師には、精密なゲノム解読情報に対応できるだけの、より正確な診療記録をつけることが求められるようになった。

われわれは、方法論上のパラダイム転換の最中にあり、遺伝研究全般、とりわけ人類遺伝研究に関しては、倫理的・法的・社会的・政治的・哲学的課題により深く取り組む必要が出てきている。これまで遺伝研究における倫理問題と言え、単一遺伝子遺伝病に関する診断情報の扱いと優生学的体験に対する反省が主要な課題であった。しかし、21世紀ゲノム研究においては、一般的な疾病に関連する遺伝情報だけではなく、必然的に大量の診療情報や生活記録という個人情報扱うことになる。さらにこれら研究成果は、ただちに産業化と結びつく傾向があるため、被験者の人権擁護、個人情報保護、知的所有権、さらには南北問題などまでに関連してくる。

これらの諸課題に関しては、すでにその一部が「ヒトゲノムと人権の世界宣言」、「人権と生物医学条約」など、国際ルールに結実し始めている。しかし、日本ではこの問題についての議論がなお不十分であり、ルールも明確になってはいない。遺伝研究にたずさわる者のすべてが、遺伝研究におけるパラダイム転換に伴う重要な課題について深く考察をめぐらし、同時に、その意味を社会に向けて発信する義務を負っていることになる。

日本遺伝学会木原賞（第78回大会）受賞者

岡田典弘 教授

1947年生



生年月日 1947年（昭和22年）10月17日生

【学 歴】

1973年 3月 東京大学農学部農芸化学科卒業

1975年 3月 東京大学大学院薬学系研究科 修士課程（製薬化学専攻）修了

1978年 3月 東京大学大学院薬学系研究科 博士課程（製薬化学専攻）修了

1978年 3月 東京大学 薬学博士号取得

【職 歴】

1978年 4月 国立がんセンター研究所 研究生

1978年 6月 USA/NIH 研究員

1979年 4月 筑波大学 生物科学系 講師

1988年11月 筑波大学 生物科学系 助教授

1992年 4月 東京工業大学 生命理工学部 教授

2000年 4月 東京工業大学大学院 生命理工学研究科教授

2003年 4月 自然科学研究機構 基礎生物学研究所 教授併任

【研究歴】

1985年 ゲノム中の散在性反復配列の多くが tRNA を起源として進化して来たことを発見

1993年 SINE 法で系統樹作成の可能なことを証明

1996年 SINE と LINE が末端の配列を共有していることを発見し、SINE の増幅モデルを提出

1997年 クジラが偶蹄類の内部系統から進化して来たことを証明

1999年 クジラと最も近縁な哺乳動物はカバであることを証明

2002年 SINE の増幅モデルを生体内のレトロトランスポジションにより証明

2004年 ビクトリア湖へのシクリッド研究のための調査隊を組織

【受賞歴】

1981年 日本生化学会奨励賞受賞

1986年 日本遺伝学会奨励賞受賞

1996年 第4回木原記念財団学術賞受賞

2001年 AAAS (American Association for the Advancement of Science) Fellow

2003年 日本進化学会木村賞受賞

2006年 藤原賞

受賞研究の概要

課題

レトロポゾンを用いることによる生物進化の機構解明への新しいアプローチ
Retroposons: A new approach to elucidate the evolution of organisms

岡田典弘博士は、tRNA の分子生物学や生化学に関する研究テーマで博士号を取ったのですが、筑波大学の講師のときに新しい研究を立ち上げた後は、進化の分野に果敢に挑戦して、特にゲノム進化の分野で新しい発見を次々に発表し、この分野のバイオニアとして世界的に認知されています。

まずその発端は20年前に溯ります。当時博士は、それまでの tRNA に関する研究の流れから、分子生物学的手法を用いて、ゲノム中に存在する短い散在性の反復配列（SINE, サイン）を簡単に検出出来る実験系を開発しました（Endoh & Okada, PNAS 1986a）。この系を用いて博士は、SINE が tRNA を起源としていることを明らかにしました（Sakamoto

& Okada, JME 1985; Matsumoto et al., PNAS 1986b). この博士の発見は驚きをもって世界にむかえられましたが、更に博士はこの研究を発展させ、SINE が広く脊椎動物や無脊椎動物ばかりでなく、植物にもあまねく存在しており、その起源はすべて tRNA であるという一般原理を確立しました (Yoshioka et al., PNAS 1993a; Takasaki et al., PNAS 1994).

更に博士は SINE を用いて系統問題を決定する新しい系を開発しました。SINE はレトロポゾン的一种であり、逆転写された情報が一旦ゲノム中に挿入されれば、再び切り出されることがないので、SINE を特定の座に共通に持つ種は単系統をなすという新しい原理を確立し、応用したのです。1993年にサケ科サケ属の系統関係を決定しましたが、これは今やサケ属の系統関係の決定版となっています (Murata et al., PNAS 1993b)。これがレトロポゾンを用いて系統が決定された最初の例となりました。彼はこの原理を応用して、クジラの起源の問題に取り組み、クジラが偶蹄類のカバや牛に遺伝的に近いことを明らかにしました (Shimamura et al., Nature 1997)。この成果は Nature 誌に発表され、さらにカバがクジラに最も近い現存する哺乳類であることを最終的に証明しました (Nikaido et al., PNAS 1999)。これらの発見は、当時多くの一般紙上にも取り上げられたものです。この研究は Science 誌上でも3回論評され、専門家の注目を受けたにとどまらず、Scientific American, Science News や New York Times にも紹介され世界の一般の読者からも注目を浴びました。この後、歯クジラ (Nikaido et al., PNAS 2001)、シクリッド (Takahashi et al., MBE 2001)、カメ (Sasaki et al., MBE 2004) の系統が、SINE 法を用いて決定されています。SINE 法が系統決定の最も有効な方法であるとの結論は確立し、分子進化学の最も著名な教科書である Molecular Evolution and Phylogenetics (Nei & Kumar) や Fundamentals of Molecular Evolution (Gaur & Li) にも詳細に紹介されています。最近では、SINE 法を拡大し、LINE を用いて、コウモリ、ウマ、イヌが単系統である事を証明し、哺乳類の系統進化の全体像を明らかにしつつあります (Nishihara et al., PNAS 2006)。

博士が SINE が tRNA を起源としている事を発見した当時の大きな疑問の一つは、SINE がどのようなメカニズムで増幅するのか? という事でした。この問題の端緒は、やはり岡田研究室でなされた「SINE と LINE の 3' 末端は同じ配列である」という発見です (Ohshima et al., MCB 1986)。この発見により、SINE の増幅のメカニズムに関するモデルが提案されましたが、岡田博士は実際に、SINE が LINE に依存して増幅するメカニズムを分子生物学的手法により証明しました (Kajikawa & Okada, Cell 2002)。

岡田博士は2004年からタンザニアのビクトリア湖に調査隊を派遣し、シクリッド (カワスズメ魚類) のサンプルを集める生態調査のグループを発足させました。ビクトリア湖に調査隊が送られたのは日本で初めての事です。今まで日本からビクトリア湖に調査隊が送られていなかったのは、ビクトリア湖が濁っていて生態観察に不向きなためです。しかし、700種にも及ぶビクトリア湖のシクリッドがこの1万2千年という短い間に種分化を遂げた事を考えると、分子進化学的な観点からは種形成の分子機構解明にとって、これ以上理想的な生態群は存在しないと考えられます。岡田博士の目論みは、生態学、形態学、集団遺伝学、発生学に分子生物学を取り込んで、シクリッドの種形成の分子機構を総合的に明らかにすることですが、既にオプシン遺伝子の種形成における重要性が岡田研究室から報告されています (Terai et al., PNAS 2002; Sugawara et al., 2005)。

一方で、哺乳類に特異的に存在する SINE の配列が良く保存されているという発見にもとづき、岡田博士は SINE が哺乳動物を作り上げた大きな原因になったのではないかと、言う仮説を検証するプロジェクトを発足させました (Nishihara et al., Genome Res. 2006)。シクリッドの種形成を小進化と名付けるとすれば、哺乳類の出現は大進化ということになり、大進化と小進化双方の分子機構を分子生物学的に解明するというテーマを自らに課して研究に取り組んでおられます。

以上述べてきたように、岡田博士の研究のオリジナルな点は、レトロポゾンの基礎研究に根ざした分子生物学的発見を基に進化研究に一貫して果敢に挑戦し、成果をあげてこられた点にあります。SINE 研究及びシクリッド研究は内外で非常に高く評価され、ポストゲノム科学の観点からも新しい研究展開が期待されています。その受賞内容の一端は添付されている受賞歴に紹介した通りです。

5 つの主要論文

1. Endoh H. and Okada N. Total DNA transcription in vitro: A procedure to detect highly repetitive and transcribable sequences with tRNA-like structures. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* 83, 251–255 (1986)
2. Shimamura M., Yasue H., Ohshima K., Abe H., Kato H., Kishiro T., Goto M., Munechika I. and Okada N. Molecular evidence from retrotransposons that whales form a clade within even-toed ungulates. *Nature* 388, 666–670 (1997)
3. Nikaido M., Rooney A.P. and Okada N. Phylogenetic relationships among cetartiodactyls based on insertions of short and long interspersed elements: Hippopotamuses are the closest extant relatives of whales. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* 96, 10261–10266 (1999)
4. Kajikawa M. and Okada N. LINEs mobilizes SINEs in the eel through a shared 3' sequence. *Cell* 111, 433–444 (2002)
5. Terai Y., Mayer W.E., Klein J., Tichy H. and Okada N. The effect of selection on a long wavelength-sensitive (LWS) opsin gene of Lake Victoria cichlid fishes. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* 99, 15501–15506 (2002)

日本遺伝学会奨励賞（2006年）受賞者

佐渡 敬

1965年生

〔略 歴〕

平成1（1989）年3月 北海道大学理学部生物学科動物学専攻卒業

平成3（1991）年3月 北海道大学大学院理学研究科修士課程動物学専攻修了

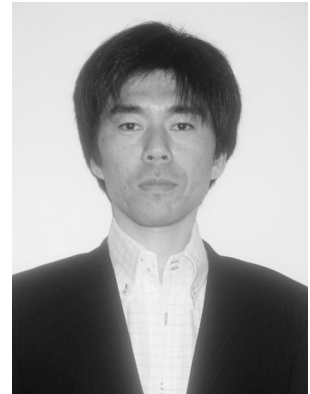
平成7（1995）年6月 北海道大学大学院理学研究科博士課程動物学専攻修了（理学博士）

平成8（1996）年1月～平成9年10月
ケンブリッジ大学解剖学科ポスドク

平成9（1997）年11月～平成11年4月
マサチューセッツ総合病院心臓循環器センターポスドク

平成11（1999）年5月～国立遺伝学研究所総合遺伝研究系人類遺伝研究部門助手

平成14（2002）年11月～平成18年3月
科学技術振興機構さきがけ研究21研究員（兼任）



〔遺伝学会における活動歴〕

第78回大会シンポジウム企画準備中（オーガナイザー佐渡 敬，阿部訓也）

第77回大会プログラム編集委員

第62，63，65，66，71，73－75，77回大会一般講演（第73回，第77回大会ベストペーパー賞受賞）

第76回大会シンポジウム講演

日本遺伝学会推薦による平成17年度東レ科学振興会科学技術研究助成

〔研究題目〕

（和文）X染色体不活性化の分子機構

（英文）Molecular mechanism of X chromosome inactivation

〔推薦理由〕

佐渡敬博士は，X染色体不活性化の分子機構に関する研究でこれまで多大な成果をあげており，遺伝学会会員の中でも特に将来有望な若手研究者の一人といえます．彼は1995年北海道大学の高本信夫先生のもとで学位を取得し，英国ケンブリッジ大学と米国マサチューセッツ総合病院へ留学したのち，1999年より国立遺伝学研究所に着任し研究を行っています．この間，多少の紆余曲折はあるものの，ほぼ一貫してX染色体不活性化機構の解明に取り組んできました．その仕事はX染色体不活性化に必須である *Xist* RNA の発現調節，特に DNA のメチル化との関係に始まり，最近では独自に見いだしたアンチセンスRNAである *Tsix* による *Xist* の調節機構へと発展しています（Development 2001）．この *Xist* と *Tsix* による不活性化の調節は，近年特に話題を集めている non-coding RNA 研究のさきがけとなるものであり，とくにアンチセンス転写が *Xist* 調節領域のエピジェネティックな修飾状態を変化させるという発見は高く評価されています（Developmental Cell 2005）．また，彼の仕事はこのような non-coding RNA による調節の組織特異性，細胞が本来持っている遺伝子量補償機構との関係，機能性 non-coding RNA が染色体全体を不活性化する機構の解明へと展開を見せています．彼の研究成果が高く評価されていることは，代表的論文がいずれも高い引用度を誇っていること，さき

がけ研究21に採択されたこと、Keystone Symposiumなどの一流の国際会議でしばしば口頭発表の榮譽を与えられていること、2度国際シンポジウムに招待されていることから明らかです。すでに我が国のX染色体不活性化研究の第一人者としての地位を確固たるものにしたと言えるでしょう。現在、遺伝子ノックアウトに加えて新しい技術を導入した実験系を立ち上げつつあり、今後彼の仕事が益々発展することは間違いのないところと思われます。

佐渡敬博士は長年日本遺伝学会の会員であり、まさに本学会によって育てられた研究者と言っても過言ではありません。これまでに2度ベストペーパー賞（第73回、第77回大会）を受賞しているほか、学会の運営にも積極的に協力しており、今大会でもシンポジウムを企画しています。また、人物的にも優れ、すでに多くのポストクや学生の指導に実績を上げており、今後哺乳類の発生遺伝学分野でリーダーの一人となるべき研究者であることは間違いありません。このような点を考慮して、彼は日本遺伝学会奨励賞候補者として最適の人物であると思われます。

業績リスト

(代表的原著論文)

1. Ohhata, T., Hoki, Y., Sasaki, H., and Sado, T. (2006). *Tsix*-deficient X chromosome does not undergo inactivation in the embryonic lineage in males: implications for *Tsix*-independent silencing of *Xist*. **Cytogenet. Genome Res.**, *113*, 345–349.
2. Sado, T., Hoki, Y., and Sasaki, H. (2005). *Tsix* silences *Xist* through modification of chromatin structure. **Dev. Cell** *9*, 159–165.
3. Sado, T., Okano, M., Li, E., and Sasaki, H. (2004). *De novo* DNA methylation is dispensable for the initiation and propagation of X chromosome inactivation. **Development** *131*, 975–982.
4. Ohhata, T., Tachibana, M., Tada, M., Tada, T., Sasaki, H., Shinkai, Y., and Sado, T. (2004). X-inactivation is stably maintained in mouse embryos deficient for histone methyltransferase G9a. **genesis** *40*, 151–156.
5. Sado, T., Li, E., and Sasaki, H. (2002). Effect of *Tsix* disruption on *Xist* expression in male ES cells. **Cytogenet. Genome Res.** *99*, 115–118.
6. Sado, T., Wang, Z., Sasaki, H., and Li, E. (2001). Regulation of imprinted X-chromosome inactivation in mice by *Tsix*. **Development** *128*, 1275–1286.
7. Sado, T., Fenner, M. H., Tan, S-S., Tam, P., Shioda, T., and Li, E. (2000). X-inactivation in the mouse embryo deficient for *Dnmt1*: Distinct effect of hypomethylation on imprinted and random X-inactivation. **Dev. Biol.** *225*, 294–303.
8. Sado, T., Tada, T., and Takagi, N. (1996). Mosaic methylation of *Xist* gene before chromosome inactivation in undifferentiated female mouse embryonic stem and embryonic germ cells. **Dev. Dynamics** *205*, 421–434.

(総説)

1. Sado, T. and Ferguson-Smith, A. C. (2005). Imprinted X inactivation in the preimplantation mouse embryos. **Hum. Mol. Genet.** *14*, Spec. 1, R59–64.



日本遺伝学会奨励賞（2006年）受賞者

鈴木 善幸

1970年生

【略 歴】

学歴：

1988年 3 月 東京学芸大学附属高等学校卒業
1989年 4 月 秋田大学医学部医学科入学
1995年 3 月 秋田大学医学部医学科卒業（医師免許取得）
1995年 4 月 秋田大学大学院医学研究科博士過程入学
1999年 3 月 秋田大学大学院医学研究科博士課程修了（博士（医学）取得）

2000年 3 月 総合研究大学院大学（博士（理学）取得）

職歴：

1999年 4 月－2002年 2 月 日本学術振興会特別研究員（PD）
2000年 7 月－2002年 2 月 ペンシルバニア州立大学博士研究員
2002年 3 月－現在 国立遺伝学研究所生命情報・DDBJ研究センター遺伝情報分析研究室助手
2004年 4 月－現在 総合研究大学院大学生命科学研究科遺伝学専攻助手（併任）



【遺伝学会における活動歴】

第69回大会（1997年），第70回大会（1998年），第71回大会（1999年）：一般講演。

第77回大会（2005年）：準備委員・事務局，ミニシンポジウム「正の自然選択による分子進化」企画・講演。
Genes and Genetic Systems 査読。

【研究題名】

（和文）自然選択検出法の開発と応用

（英文）Development of methods for detecting natural selection and their applications

【推薦理由】

鈴木善幸会員は，約10年間にわたって「蛋白質のアミノ酸配列レベルに働く自然選択圧の検出法の開発とその応用」に関する研究を行ってきた。彼は，単一のアミノ酸座位に働く自然選択圧を最大節約法にもとづいて検出する方法（鈴木—五條堀法）を開発し，そのコンピューター・プログラム・パッケージ ADAPTSITE を製作して配布している。また，鈴木—五條堀法とベイズ法にもとづいた方法（ヤング法）を比較し，前者が一般に偽陽性率が低いのに対し後者は偽陽性率が高くなる場合があること，さらに後者は前者におけるウィンドウ解析に相当していることを示した。また，鈴木—五條堀法の祖先配列推定過程にベイズ法を取り入れた改良法，さらに最尤法にもとづいて単一のアミノ酸座位に働く自然選択圧を検出する方法を開発した。また，蛋白質の3次元構造中で球を動かしながらそこに含まれるアミノ酸座位をグループ化して自然選択圧を検出する3次元ウィンドウ解析法を開発した。これらの方法によりそれまで検出できなかった自然選択圧を検出できるようになった。

さらに彼は，これらの方法を用いてC型肝炎ウイルスの全蛋白質，インフルエンザA型ウイルスならびにヒト免疫不全ウイルス1型の外被糖蛋白質，ポリオウイルスの外殻蛋白質などを解析し，おもに抗原領域に正の自然選択圧が働いていることを明らかにし，正の自然選択圧検出が抗原領域の予測に役立つことを示した。また，ワクチンや抗ウイルス薬の標的アミノ酸座位における機能的制約の強さとそれらに対する耐性ウイルス変異体産生頻度との間に負の相関があることを示し，一般に効果の高いワクチンや抗ウイルス薬を開発するためには強い負の自然選択圧が働いている領域を標的として用いるべきであることなどを提唱した。

鈴木—五條堀法開発に関する論文はこれまでに100回以上引用され，複数の研究グループによって用いられている。またこれらの方法は今後配列データが蓄積されていくにつれてさらに有用性が増大していくと

考えられる。さらに、彼のウイルス蛋白質に働く自然選択圧に関する発見もウイルス感染症に対する治療法や予防法の開発に役立つと考えられる。以上のように、彼の業績は遺伝学のみならずウイルス学分野においても重要と考えられ、今後の発展も大いに期待できることから、鈴木善幸会員を日本遺伝学会奨励賞に推薦する。

[業績リスト]

(総説)

Yoshiyuki Suzuki and Takashi Gojobori: The origin and evolution of human T-cell lymphotropic virus types I and II. *Virus Genes*, 1998, 16: 69–84.

Yoshiyuki Suzuki, Yumi Yamaguchi-Kabata, and Takashi Gojobori: Nucleotide substitution rates of HIV-1. *AIDS Reviews*, 2000, 2: 39–47.

Yoshiyuki Suzuki, Allison Wyndham, and Takashi Gojobori: Virus evolution. In *Handbook of Statistical Genetics* (David J. Balding, Martin Bishop, and Chris Cannings eds.), 2001, Pp. 377–413. John Wiley and Sons, Ltd, Chichester.

Yoshiyuki Suzuki and Takashi Gojobori: Analysis of coding sequences. In *The Phylogenetic Handbook: A Practical Approach to DNA and Protein Phylogeny* (Marco Salemi and Anne-Mieke Vandamme eds.), 2003, Pp. 283–311. Cambridge University Press, Cambridge.

(代表的原著論文)

Yoshiyuki Suzuki, Takeshi Sanekata, Mitsuo Sato, Kazuhiko Tajima, Yukihiisa Matsuda, and Osamu Nakagomi: Relative frequencies of G (VP7) and P (VP4) serotypes determined by polymerase chain reaction assays among Japanese bovine rotaviruses isolated in cell culture. *Journal of Clinical Microbiology*, 1993, 31: 3046–3049.

Yoshiyuki Suzuki and Takashi Gojobori: The origin and evolution of Ebola and Marburg viruses. *Molecular Biology and Evolution*, 1997, 14: 800–806.

Yoshiyuki Suzuki, Takashi Gojobori, and Osamu Nakagomi: Intragenic recombinations in rotaviruses. *FEBS Letters*, 1998, 427: 183–187.

Yoshiyuki Suzuki, Kazuhiko Katayama, Shuetsu Fukushima, Tsutomu Kageyama, Akira Oya, Hirofumi Okamura, Yasuhiro Tanaka, Masashi Mizokami, and Takashi Gojobori: Slow evolutionary rate of GB virus C/hepatitis G virus. *Journal of Molecular Evolution* 1999, 48: 383–389.

Yoshiyuki Suzuki and Takashi Gojobori: A method for detecting positive selection at single amino acid sites. *Molecular Biology and Evolution* 1999, 16: 1315–1328.

Yoshiyuki Suzuki: *Molecular Evolution of Pathogenic Viruses*. Ph.D. dissertation, Department of Genetics, School of Life Science, The Graduate University of Advanced Studies, Hayama, Japan, 1999.

Yoshiyuki Suzuki, Takashi Gojobori, and Masatoshi Nei: ADAPTSITE: detecting natural selection at single amino acid sites. *Bioinformatics*, 2001, 17: 660–661.

Yoshiyuki Suzuki and Takashi Gojobori: Positively selected amino acid sites in the entire coding region of hepatitis C virus subtype 1b. *Gene*, 2001, 276: 83–87.

Yoshiyuki Suzuki and Masatoshi Nei: Reliabilities of parsimony-based and likelihood-based methods for detecting positive selection at single amino acid sites. *Molecular Biology and Evolution*, 2001, 18: 2179–2185.

Yoshiyuki Suzuki and Masatoshi Nei: Origin and evolution of influenza virus hemagglutinin genes. *Molecular Biology and Evolution*, 2002, 19: 501–509.

Yoshiyuki Suzuki and Masatoshi Nei: Simulation study of the reliability and robustness of the statistical methods for detecting positive selection at single amino acid sites. *Molecular Biology and Evolution* 2002, 19: 1865–1869.

Yoshiyuki Suzuki, Galina V. Glazko, and Masatoshi Nei: Overcredibility of molecular phylogenies obtained by Bayesian phylogenetics. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 2002, 99: 16138–16143.

Yoshiyuki Suzuki: Negative selection on neutralization epitopes of poliovirus surface proteins: implications for prediction of candidate epitopes for immunization. *Gene* 2004, 328: 127–133.

Yoshiyuki Suzuki: New methods for detecting positive selection at single amino acid sites. *Journal of Molecular Evolution* 2004, 59: 11–19.

Yoshiyuki Suzuki and Masatoshi Nei: False positive selection identified by ML-based methods: examples from the Sig1 gene of diatom *Thalassiosira weissflogii* and the tax gene of a human T-cell lymphotropic virus. *Molecular Biology and Evolution* 2004, 21: 914–921.

Yoshiyuki Suzuki: Three-dimensional window analysis for detecting positive selection at structural regions of proteins. *Molecular Biology and Evolution* 2004, 21: 2352–2359.

Yoshiyuki Suzuki: Statistical properties of the methods for detecting positively selected amino acid sites. *Gene* 2006, 365: 125–129.

Yoshiyuki Suzuki: Ancient positive selection on CD155 as a possible cause for susceptibility to poliovirus infection in simians. *Gene* 2006, 373: 16–22.

Yoshiyuki Suzuki: Natural selection on the influenza virus genome. *Molecular Biology and Evolution* 2006, 23: 1902–1911.

日本遺伝学会国内名誉会員候補 三浦謹一郎会員

三浦謹一郎博士

1931年3月25日生

【略 歴】

昭和28年3月 学習院大学理学部科学科卒業
昭和30年3月 東京大学大学院化学系研究科修士課程修了
昭和33年3月 同 博士課程修了，同年7月理学博士
昭和33年4月 京都大学助手（ウィルス研究所）
昭和36年5月 東京大学助手（理学部，応用微生物研究所）
昭和38年4月 名古屋大学助教授（理学部）
昭和44年11月 国立遺伝学研究所 分子遺伝部長
昭和58年4月 東京大学教授（工学部）
平成3年4月 学習院大学教授（理学部）生命分子科学研究所所長
平成13年4月 （株）プロテオス研究所 代表取締役社長・研究所長（現非常勤取締役研究所長）
平成14年4月 北里大学（大学院感染制御科学府）客員教授（17年3月まで）
平成16年3月 千葉工業大学総合研究所教授
平成18年4月 東京大学（大学院新領域創成科学研究科）客員教授



【遺伝学会における活動歴】

昭和46～47年 評議員
昭和50～51年 評議員
昭和56～59年 企画・集会幹事
昭和60～63年 評議員
平成3～6年 評議員
（その他）学会賞選考委員会委員（数回）

【称号】

昭和63年7月 国立遺伝学研究所名誉教授
平成3年5月 東京大学名誉教授

【受賞】

昭和54年5月 中日文化賞
昭和63年6月 日本学士院賞
平成14年5月 勲三等旭日中授賞

推 薦 書

三浦謹一郎先生は，昭和33年に東京大学大学院化学系研究科博士課程を終了され，東京大学，京都大学，名古屋大学，国立遺伝学研究所，学習院大学，プロテオス研究所，北里大学，千葉工業大学において，実に半世紀の長きにわたり，コロイド化学，生化学，分子生物学，分子遺伝学，生物物理学，微生物学，生命工学など広汎な分野で先端的な研究を進められると共に，広い見識，温厚な人柄と新しい研究分野の開拓に強い熱意をもって学生および後進の教育指導に尽力してこられました。

先生のご業績は，主として核酸およびたんぱく質の構造・機能・合成機構という分子生物学の中心的領域ですが，最近の先生のご研究はたんぱく質の設計と合成を目指す生命分子工学といってもよい領域でのご活躍であります。先生のご研究の特徴は，化学を基盤とする精密な構造解析をもととした遺伝子の機能と情報発現機構の解明と言えましょう。

数々の優れたご業績の中でも特に国立遺伝学研究所で行われた真核生物メッセンジャーリボ核酸のキャップ構造の歴史的発見で，これにより原核生物と真核生物の遺伝子発現機構に大きな違いがあることが示されました。世界的に大きく注目された研究で，国際学会での講演に招待されたり，教科書などに引用されたり，文献の引用度が高いという結果を生んでおります。先生のこのようなご業績に対して昭和54年に中日文化賞が，昭和63年には日本学士院賞が授与されております。

この発見後も，引き続きメッセンジャー RNA やウィルス RNA を中心に，たんぱく質生合成の分子機構およびたんぱく質設計のための基本構造形成機構について強い関心を持たれ，現在も精力的に研究を進められて数々の成果を出しておられます。特に最近では，「真核生物の翻訳開始機構は全生物に共通する部分と生物種ごとに独自に進化した部分がある」ことを見出され，大変注目されております。（「ウィルス遺伝子とその情報発現方法における多様性」“機能性 Non-coding RNA” 河合剛太，金井昭夫編，クバプロ，pp. 127-141（2006））。

これらを含めた先生のご研究は240編の原著論文，44編の総説，その他多くの著書にまとめられており，国際的にも高く評価されております。また，先生はご研究以外の社会活動にも精力的に従事され，日本遺伝学会の評議員などや関連学会の役員として，旧遺伝学雑誌などの編集委員，遺伝学普及会の理事，評議員，さらには一般向け書籍の出版や講演などを通して日本の遺伝学振興のために多大な貢献をされてきました。

三浦謹一郎先生は，遺伝学において永年にわたるご功績が顕著でありますので，ここに遺伝学会名誉会員として推薦させていただきます。

2006年度 日本遺伝学会第78回大会総会資料集

(総会次第に準拠して記載)

1) 2006年度役員名簿

会 長	石和 貞男				
評議員	郷 通子	五條堀 孝	河野 重行	米田 好文	
全国区	郷 通子	五條堀 孝	河野 重行	米田 好文	
全国区	真木 寿治	松田 洋一	岡田 典弘	颯田 葉子	
	東江 昭夫	山本 和生			
北海道地区	佐野 芳雄	鈴木 仁			
東北地区	木島 明博	山本 博章			
関東地区	定家 義人	篠崎 一雄			
東京地区	小林 一三	松浦 悦子			
中部地区	広海 健	能登原 盛弘			
関西地区	宮下 直彦	下田 親			
中国・四国地区	近藤 勝彦	村田 稔			
九州地区	中別府雄作	矢原 徹一			

幹 事

国内庶務幹事	田嶋 文生		
渉外庶務幹事	福井 希一		
会計幹事	斎藤 成也		
編集幹事	遠藤 隆		
企画・集会幹事	城石 俊彦		
将来計画幹事	高畑 尚之		
特別幹事	品川 日出夫		
会計監査	荒木 弘之	大田 竜也	

第78回大会委員長 小幡 裕一

遺伝学の教育と普及に関する特別委員会

委員長	武部 啓		
副委員長	池内 達郎		
委 員	向井 康比己	颯田 葉子	

学会賞選考委員会 (2006)

委員長	石和 貞男				
委 員	郷 通子	五條堀 孝 (木原賞)	真木 寿治	松浦 悦子 (奨励賞)	
	堀田 凱樹	森脇 和郎	杉浦 昌弘		

研究助成金等推薦調査委員会 (2006)

委員長	石和 貞男				
委 員	五條堀 孝	広海 健	河野 重行	松浦 悦子	岡田 典弘
	颯田 葉子	下田 親	篠崎 一雄	矢原 徹一	山本 和生

2) 学術賞・研究助成等審査状況

今年度は以下の方々が、受賞されています。(学会推薦による申請に関する年間スケジュールは、学会ホームページ該当欄にて確認してください。)

1. 東レ科学技術研究助成

佐渡 敬

「核リプログラミングにおけるX染色体活性制御の意義」

2. 2006年度 女性科学者に明るい未来をの会「猿橋賞」

森 郁恵

「神経回路と行動の分子神経遺伝学

Molecular Neurogenetics of Neural Circuit and Behavior」

3. 山田科学振興財団2006年度研究援助

古賀 章彦

「メダカの体色突然変異に転移生遺伝因子が大きくきよすることの実証」

3) 2013年国際遺伝学大会開催招致趣意書

遺伝学は我が国が世界に誇れる学問です。

遺伝学の始祖であるグレッグ・メンデルが1865年にその金字塔ともいべき論文を発表しましたが、ついに認められず、彼の死後16年を経た1900年に再発見されたことはよく知られています。また、1906年にウィリアム・ベーツソンが、生命の世代的継承としての生命現象を理解するには、多方面の研究分野を統合的に駆使しなければならないということで、「遺伝学 (genetics)」という言葉を提唱致しました。我が国の草分け的な遺伝学者達は、このメンデルの再発見の年のたった15年後、そしてベーツソンによる遺伝学の提唱後わずか9年後の、大正4年にその活動母体としての学会を結成しました。因みに、英国で遺伝学会が結成されたのは、この5年後です。つまり、我が国における遺伝学はメンデル遺伝学の再生と時をほぼ同じく世界に先駆けて歩んできたといえます。

メンデル論文の再発見者の一人はドイツのカール・コレンスですが、1920年代に彼のもとに留学した若き研究者が、木原均博士です。木原博士は、「地球の歴史は地層に、生物の歴史は染色体に記されている」という有名な言葉を遺していますが、コムギの研究を通して、1929年世界で初めて「ゲノム説」を提唱しました。つまり、生命活動の遺伝的最小単位をゲノムと認識した最初の学者の一人でした。木原博士の教えは多くの後継者に伝達されましたが、その中の一人が木村資生博士です。木村博士の分子進化の中立説は世界的に高く評価され、やがて木村博士は斯界で世界最高の荣誉であるダーウィンメダルを受賞しました。木原門下以外にも、遺伝子重複による進化を提唱した大野乾博士、オカザキ・フラグメントの岡崎令治博士等々多数の世界的な遺伝学者が我が国から輩出しています。また、ライフサイエンス分野で唯一のノーベル賞受賞者も利根川進博士で、遺伝学の分野でもあります。

今世紀初頭にヒトゲノムの塩基配列が決定されたことは周知ですが、我が国の貢献も少なくありませんでした。和田昭允博士のヒトゲノム解読の先駆的な提唱と松原謙一博士や榊佳之博士の主導のもとに我が国の多数の研究者が活躍したことは、世界的にもよく知られています。木原博士の唱えたゲノム説が、その最小単位である塩基のレベルまで到達したのです。この結果、遺伝学は一般の人にも接近してきています。つまり、個人の持っている遺伝子が、その人の生活にどのように関わっているか、ということをも具体的に知ることが可能になってきているのです。例えば、特定の病気に罹りやすい人、特定の食物の摂取に気をつけたほうがいい人などが、個人の遺伝子を調べることによって分かるようになってきたのです。また、農作物・家畜の改良や年々悪化の一途を辿る地球環境の問題を遺伝子のレベルで、つまり冷徹な科学の目で取組めるようになってきています。

遺伝学は現在、前記のように、研究の世界に留まることなく、個人個人の生活の中に入ってきています。学問とはそうあるべきだと私達は考えます。また、この学問には取組むべき多くの問題が眼前に立ちはだかっています。ヒトは一体いくつの遺伝子をもっているのか、その働きはどうか、という切実な問題の解決も端緒についたばかりです。とりわけ、老化の問題への遺伝学的取組みは、単に研究者の問題だけでなく、人類全体の課題となっています。老化は止めることはできませんが、個人のもっている遺伝子のレベルで、より快適な老後生活を送るための提案をすることは、これからの遺伝学の悲願ともいえるべき大きな課題です。

国際遺伝学大会は、国際遺伝学連合(International Genetics Federation、添付資料)が、5年に一度世界の開催立候補国の中から種々の条件に相応しい国を選出して開催する、いわば学会のオリンピックともいえる大会です。思い起こせば、我が国が驚異的な早さで第二次世界大戦後の敗戦の痛手から立ち直り、東京オリンピックを開催したのは1964年でした。その4年後、木原均博士を大会委員長として、国際遺伝学大会が我が国で初めて開催されました。世界の学者に滾るような復興の姿を見せつけただけでなく、我が国の遺伝学の予想を超える発展を知らしめたのです。その半世紀後、再度の経済復興を機に、再び国際遺伝学(第21回)大会を主催することは、我が国の文化の一端を担う遺伝学の、その後の発展を世界に認識させる絶好の機会と考えます。一方、この学問をさらに発展させ、個人生活の中になお一層深く浸透させるには、国際的な競争と協調が必須となります。先達が、世界を相手に心血を注いで発展させてきたこの学問

を、更に飛躍させ人類の福祉に貢献することは私達の使命です。

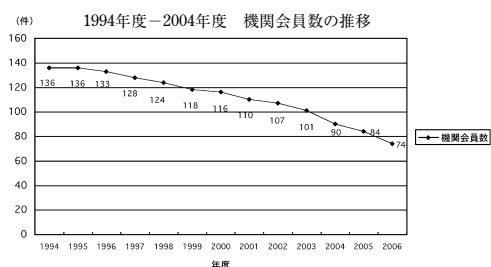
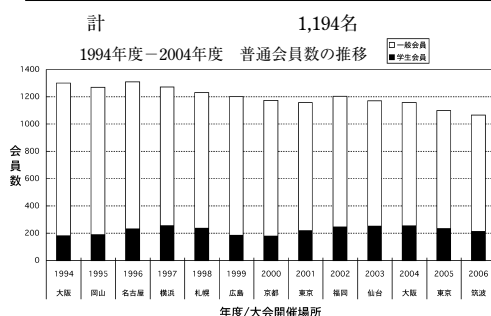
私達は、第21回国際遺伝学大会を2013年京都で開催することを計画し準備を進めていますが、この大会において、広範な遺伝学の講演、議論ならびに意見交換を、特に「生命の継承」、「生命現象の統合した再構築」、「多様性とサステイナビリティ」、「食料と医療」、「遺伝学の普及と教育」といった課題について行った後、世界の遺伝学者の合意のもとに、環境問題について第2となる京都宣言を世界に向けて訴える予定です。その宣言では、遺伝学的見地から人類の福祉と地球の回復に対してなすべき具体的方策を広く世界に向かって提言することになります。

つきましては、私共の趣旨を宜しくご理解の上、2013年の第21回国際遺伝学大会の開催に何卒ご協力・ご援助を賜りますようお願い申し上げます。

(国際遺伝学大会招致ワーキンググループ＝五条堀孝・館野義男・福井希一)

4) 会員数 (2006年 9 月 1 日現在)

普通会員	1,063名 (内学生会員 210名)
外国会員	19名
機関会員	74件
賛助会員	7件
名誉会員	国内 15名
	外国 16名



5) 2006年度中間報告

A 収入

(一般会計) (2006年 6 月30日現在)

(単位千円)

摘 要	(A) 予 算	(B) 1 月～ 6 月 収入額	(C) 7 月～12月 収入見込額	(B + C) 収入見込額
1 学 会 費	10,000	5,228	4,500	9,728
2 賛助会費	220	0	200	200
3 科学研究費助成金	5,000	0	5,100	5,100
4 事業収入	4,000	1,644	2,128	3,772
雑誌売上	1,500	339	1,128	1,467
別刷売上	2,500	1,305	1,000	2,305
利 息	0	0	0	0
5 木原基金	200	0	200	200
6 雑 収 入	100	506	30	536
小 計	19,520	7,378	12,158	19,536
7 繰り越し金	23,575	26,178	—	26,178
総 計	43,095	33,556	12,158	45,714

(木原賞)

(2006年 9 月 7 日現在) (単位円)

摘 要	収入額
1 定期預金解約	236,748
2 利 息	643
小 計	237,391
3 繰り越し金	2,078,476
総 計	2,315,867

(特別事業基金)

(2006年 9 月 7 日現在) (単位円)

摘 要	収入額
1 繰り越し金	15,096,336
総 計	15,096,336

B 支 出

(一般会計) (2006年6月30日現在)

(単位千円)

摘 要	(A) 予 算	(B) 1月～6月 支出額	(C) 7月～12月 支出見込額	(B+C) 支出見込額
1 事業費	12,500	4,892	7,325	12,217
雑誌製作費	10,500	4,668	5,500	10,168
大会補助費	1,000	0	1,000	1,000
大会学生旅費補助費	800	0	825	825
協力委員会分担金	200	224	0	224
2 評議委員会／幹事会費	700	89	500	589
3 事務費	3,050	1,134	1,816	2,950
雑誌発送費	1,000	431	569	1,000
封筒代	250	221	29	250
編集経費	1,100	239	761	1,000
事務所経費	700	243	457	700
4 学会賞関係費	550	3	547	550
5 選挙関係費	1,300	15	1,285	1,300
6 謝 金	1,400	634	620	1,254
小 計	19,500	6,767	12,093	18,860
7 予備費	23,595	—	26,854	26,854
総 計	43,095	6,767	38,947	45,714

(木原基金)

(2006年9月7日現在)

(単位円)

摘 要	支出額
1 木原賞副賞 (一般会計へ)	200,000
小 計	200,000
2 予備費	2,115,867
総 計	2,315,867

(特別事業基金)

(2006年9月7日現在) (単位円)

摘 要	支出額
1 予備費	15,096,336
総 計	15,096,336

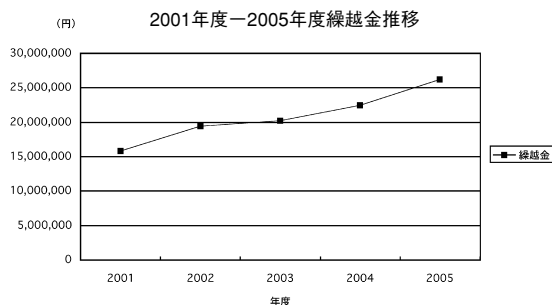
6) 2005年度決算報告書

A 収 入 (単位 円)

摘 要	予 算	決 算
1 学会費	10,500,000	10,097,000
2 賛助会費	240,000	220,000
3 科学研究費補助金	4,500,000	5,100,000
4 事業収入	4,000,000	4,003,881
雑誌売上	1,500,000	1,723,490
別刷売上	2,500,000	2,280,328
利 息	0	63
5 雑収入	500,000	125,373
小 計	19,740,000	19,546,254
6 繰り越し金	21,970,000	22,419,914
総 計	41,710,000	41,966,168

B 支 出 (単位 円)

摘 要	予 算	決 算
1 事業費	14,000,000	10,954,513
雑誌製作費	12,000,000	9,554,513
大会補助費	1,000,000	500,000
大会学生旅費補助	800,000	820,000
協力委員会分担金	200,000	80,000
2 評議委員会／幹事会費	1,100,000	816,626
3 事務費	3,000,000	2,395,196
雑誌発送費	900,000	910,582
封筒代	300,000	0
編集経費	1,100,000	1,015,829
事務所経費	700,000	468,785
4 学会賞関係費	300,000	361,651
5 選挙関係費	0	0
6 謝 金	1,500,000	1,259,340
小 計	19,900,000	15,787,326
7 予備費	21,810,000	26,178,842
総 計	41,710,000	41,966,168



7) 2007年度予算案

A 収 入

(一般会計) (単位千円)

摘 要	予 算
1 学 会 費	10,000
2 賛助会費	200
3 科学研究費助成金	4,500
4 事業収入	4,005
雑誌売上	1,500
別刷売上	2,500
利 息	5
5 木原基金	200
6 雑 収 入	50
小 計	18,955
7 繰り越し金	26,854
総 計	45,809

(木原基金) (単位円)

摘 要	予 算
1 繰り越し金	2,115,867
2 利 息	550
小 計	2,116,417
総 計	2,116,417

(特別事業基金) (単位円)

摘 要	予 算
1 繰り越し金	15,096,336
2 一般会計より	5,000,000
3 利 息	2,400
小 計	20,098,736
総 計	20,098,736

B 支 出

(一般会計) (単位千円)

摘 要	予 算
1 事 業 費	12,700
雑誌製作費	10,500
大会補助費	1,000
遺伝学談話会補助費	300
大会学生旅費補助	800
協力委員会分担金	100
2 評議委員会／幹事会費	1,200
3 事 務 費	2,950
雑誌発送費	1,000
封 筒 代	250
編集経費	1,000
事務所経費	700
4 学会賞関係費	550
5 選挙関係費	0
6 謝 金	1,400
小 計	18,800
7 特別事業基金	5,000
8 予 備 費	22,009
総 計	45,809

(木原基金) (単位円)

摘 要	予 算
1 木原賞副賞	200,000
小 計	200,000
2 予備費	1,916,417
総 計	2,116,417

8) GGS 編集状況について

1. 論文発行状況 (第81巻)

号	掲載論文数	Review	Full	Short	Other
1	8	0	5	3	0
2	8	0	6	2	0
3	8	1	5	2	
4	9	1	6	2	0
5					
6					

2. 論文投稿状況 (9月12日現在)

	2006.4.1 ~ 2006.8.25	2005.4.1 ~ 2006.3.31 (参考)
投 稿 論 文 数	38	67
採 択 論 文 数	10	48
不採択論文数	8	10
校閲中論文数	20	9
採 択 率	55.6%	82.8%

3. 新編集委員

田坂昌生 (Tasaka, Masao: Plant molecular genetics)

奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科 教授

9) 日本遺伝学会大会開催地暦年表

大会は年輪を重ね、叢知はつどい、新しい遺伝学は芽吹く
(日本遺伝学会大会暦年表)

回	年	月	日	会 場	回	年	月	日	会 場
1	1928(昭3)	10	19	九州帝国大学農学部	40	1968(昭43)	10	7～9	広島大学教養部・政経学部
2	1929(昭4)	7	26	北海道帝国大学農学部	41	1969(昭44)	10	10～12	金沢大学工学部
3	1930(昭5)	10	31	東京農事試験場	42	1970(昭45)	10	5～7	東京女子大学短期大学部
4	1931(昭6)	10	31	京都帝国大学・楽友会館	43	1971(昭46)	10	20～22	九州大学理学部・農学部
5	1932(昭7)	10	14	名古屋医科大学	44	1972(昭47)	10	7～9	岡山大学理学部・法文学部
6	1933(昭8)	10	26	広島文理科大学 動物学教室	45	1973(昭48)	10	14～16	名古屋大学農学部
7	1934(昭9)	12	21	台北帝国大学 生物学教室	46	1974(昭49)	9	10～12	福祉会館(仙台)
8	1935(昭10)	10	21	金沢医科大学 法医学教室	47	1975(昭50)	10	3～5	日本大学三島校舎
9	1936(昭11)	10	16	岡山医科大学 生理学教室	48	1976(昭51)	10	28～30	日本生命中之島研究所(大阪)
10	1937(昭12)	7	31	北海道帝国大学理学部	49	1977(昭52)	9	28～30	北海道経済センター(札幌)
11	1938(昭13)	10	13～15	九州帝国大学農学部・医学部・九州小麦試験地	50	1978(昭53)	10	8～10	東京農業大学
12	1939(昭14)	10	14～15	科学博物館(東京)	51	1979(昭54)	10	11～13	京都大学農学部
13	1940(昭15)	8	27～28	京城帝国大学医学部	52	1980(昭55)	10	6～8	富山大学教養部
14	1941(昭16)	地方談話会大会(6会場)		(総会予定地は仙台)	53	1981(昭56)	10	12～14	広島大学総合科学部
15	1942(昭17)	10	27～28	東北帝国大学 農学研究所	54	1982(昭57)	11	19～21	九州大学医学部
16	1943(昭18)	10	20～21	京都帝国大学・楽友会館	55	1983(昭58)	10	8～10	東北大学教養部
17	1944(昭19)	地方談話会大会(7会場)		(総会予定地は名古屋)	56	1984(昭59)	11	23～25	日本大学国際関係学部
18	1946(昭21)	11	18～19	静岡高等学校	57	1985(昭60)	10	13～15	神戸大学農学部・理学部・自然科学系
19	1947(昭22)	10	21～22	松本高等学校	58	1986(昭61)	12	4～7	名古屋観光ホテル
20	1948(昭23)	10	23～24	高野山	59	1987(昭62)	10	29～30	筑波大学生物科学系
21	1949(昭24)	10	20～22	名古屋大学理学部	60	1988(昭63)	10	8～10	京都大学農学部
22	1950(昭25)	10	14～16	東京大学医学部	61	1989(平元)	10	13～15	北海道大学学術交流会館
23	1951(昭26)	10	11～12	広島大学教養部	62	1990(平2)	10	4～6	お茶の水女子大学
24	1952(昭27)	10	8～10	新潟大学医学部	63	1991(平3)	10	16～18	九州大学箱崎キャンパス
25	1953(昭28)	11	7～8	国立遺伝学研究所	64	1992(平4)	10	22～24	仙台国際センター
26	1954(昭29)	10	28～30	京都大学医学部	65	1993(平5)	9	17～19	日本大学国際関係学部
27	1955(昭30)	10	16～18	岡山大学	66	1994(平6)	10	8～10	大阪大学医学部講義棟
28	1956(昭31)	10	6～8	富山市公会堂	67	1995(平7)	10	12～14	岡山大学一般教育講義
29	1957(昭32)	9	3～5	北海道大学農学部	68	1996(平8)	10	3～5	名古屋・相山女学園大学
30	1958(昭33)	10	16～19	名古屋大学医学部	69	1997(平9)	11	1～3	横浜市立大学瀬戸キャンパス
31	1959(昭34)	11	4～7	大阪大学医学部	70	1998(平10)	9	23～25	北海道大学学術交流会館
32	1960(昭35)	10月30日～ 11月1日		九州大学工学部	71	1999(平11)	9	24～26	広島大学理学部・法学部・経済学部
33	1961(昭36)	9	1～3	東北大学川内分校	72	2000(平12)	11	3～5	京都大学農学部・京都府会館会議場
34	1962(昭37)	10	17～18	日本大学文理学部三島校舎	73	2001(平13)	9	22～24	お茶の水女子大学
35	1963(昭38)	10	8～10	東京大学教養学部	74	2002(平14)	10	1～3	九州大学箱崎キャンパス
36	1964(昭39)	10	18～20	愛媛大学	75	2003(平15)	9	24～26	東北大学川内キャンパス
37	1965(昭40)	10	18～20	京都大学医学部・楽友会館	76	2004(平16)	9	27～29	大阪大学コンベンションホール
38	1966(昭41)	8	10～12	北海道大学教養部	77	2005(平17)	9	27～29	国立オリンピック記念青少年総合センター(東京)
39	1967(昭42)	10	9～11	神戸大学教養部	78	2006(平18)	9	25～27	つくば国際会議場

10) 生物科学学会連合 第16回連絡会議報告

日時：2006年5月9日(火) 13:00~15:10

場所：(株)メディ・イシュー会議室
東京都文京区湯島2-31-14 1st ジェネシスビル5階 (TEL. 03-5805-1901)

出席：大森 正之 (本年度代表, 日本植物生理学会)

浅島 誠 (本年度副代表, 日本動物学会)

城石 俊彦 (日本遺伝学会) 山下 雅道 (日本宇宙生物科学会)

水島 昇 (日本細胞生物学会) 和田 正三 (日本植物学会)

西村 幹夫 (日本植物生理学会) 三中 信宏 (日本進化学会)

小西 真人 (日本生理学会) 片山 舒康 (日本生物教育学会)

川戸 佳 (日本生物物理学会) 武田 洋幸 (日本発生生物学会)

曾我部正博 (日本比較生理生化学会) 朴 民根 (日本比較内分泌学会)

山下 政克 (日本免疫学会) 加藤 憲二 (日本微生物生態学会)

松本 則夫 (日本薬理学会)

オブザーバー：毛利 秀雄 (日本動物学会), 小林 興 (日本生物教育学会) (計16学会19名)

鈴木あい, 福田 博 (事務局)

欠席学会：日本解剖学会 日本神経化学会 日本神経科学学会 日本生化学会 日本生態学会 日本分子生物学会
(計6学会)
(敬称略, 学会名五十音順)

配布資料：・第15回連絡会議記録(案) (資料1)
・2005年度決算報告 (資料2)
・連絡委員名簿(2006年5月2日現在) (資料3)
・生物科学学会連合の運営に関する申し合わせ事項(最終版) (参考資料)
・国際生物学オリンピックに関する資料一式

議長：大森 正之

議題に先立ち, 各学会連絡委員より自己紹介がなされた。

今後, 連絡者名簿(資料3)に変更等のある学会は事務局まで連絡していただきたい。

議題：

1. 第15回連絡会議記録(案)の確認と承認(資料1)

第15回連絡会議記録(案)が確認され, 承認された。

2. 2005年度決算報告(資料2)

事務局より, 2005年度の収支決算報告がなされ, 承認された。

3. 学会連合の今後の活動について

大森代表より, 科研費の配分に対しては, 基礎生命科学・基礎生物学の重要性と存在をアピールすべきではないか, との意見が出された。については, 今年中に学会連合から日本学術会議へ向けて, 提言文書を出していきたい。

浅島副代表より(日本学術会議副会長として), 第20期学術会議においては, 学会連合→生物科学分科会→学術会議へと意見が吸い上げられやすいシステムになっているので, 各学会が抱える問題や, 今後のライフサイエンスのあり方について考えるべき問題があれば, 是非意見を出していただきたい。

これを受け, 各連絡委員より下記の意見が出された。

- ・学校での飼育動物の扱いや, 生物実験で使用する実験材料も今後問題とされていくのではないかと危惧している。
- ・大きな生体で実験することが多いので, 動物実験に関する影響が大きい。
- ・最近社会の役に立つ研究として創薬関連の研究が奨励されているが, 施設管理が厳しくなってきたり, 医学薬学で無い基礎生物学を行っている学部では動物実験に精神薬が使用できないことになってきた。これは大変困る。
- ・宇宙での動物実験に対する国際的な基準を制定するかどうか検討されており, 今年7月北京で開催されるCOSPAR(宇宙科学に関するICSUの下部組織)の会議での審議事項になっている。
- ・①日本植物生理学会は2年前に, ケース転換作物について宣言を出しており, 植物関連学会からも賛同をいただいた。しかし, 実際栽培しようとする規制がかかる。学会連合で早急に取り上げてもらいたい。②科研費の基盤研究が伸びていない。基盤研究を充実させることが重要である。
- ・①「科研費で購入した物品を, 他の研究で使用してはいけない」等の規制がある。科研費のうち, 数十%は次の研究への使用可とする(ある程度科研費を自由に使えるように)等考慮していただきたい。
- ・③進化学会は, 母体となる学会を別に持ちながら本学会会員になっている研究者が多いため, 専門分野(農学・工学等)の応用面へ視野を広げていきたい。②若手研究者やポストドクについても問題認識している。
- ・④基礎生物学というフィールドを伸ばすためには, ある種の利益者団体として主張していかなくてはならないのではないかと。②ポストドク問題が深刻化している。
- ・①公務員試験では, 理系が農学系と比べても不利という現状が変わっていないのではないかと。②提言提出においては, 学会連合の存在は必要不可欠である。③国は, 我が国からの, 特に科学情報発信を推奨しながら, これに向けて歯を食いしばって頑張っているISIランクの小ジャーナルをサポートしない現状がある。学会連合には, 情報発信をしようとしている小規模学会のサポートを是非していただきたい。
- ・①科研費の目的外使用が厳しい。(過年度支出の問題等)。②基盤Cクラスの採択率が低いので, 配分を考慮していただきたい。
- ・各応用分野からも基礎研究だと訴える内容が多くなり, 基礎生物学とはどのようなものを指すのかハッキリした言葉で説明できるようにする必要がある。
- ・④実験動物の問題。②科研費の基盤研究については, 一度だけでなく, 度重ねて提言していかななくてはならないのではないかと。
- ・学会の法人化について検討している。
- ・①学会連合は, 提言するための実行力を持たなければならない。②実験動物の輸入が規制される前に提言していくのが重要なのではないかと。

4. 国際生物学オリンピックについて（資料有）

オブザーバー：毛利先生（日本動物学会）、小林先生（日本生物教育学会）より、国際生物学オリンピック（以下、IBO）および国際生物学オリンピック日本委員会（以下、JBO）の紹介がなされた。

▷第17回国際生物学オリンピックは、2006年7月にアルゼンチンでおこなわれる。（日本は昨年度から参加）

▷今年度は、SSH（Super Science Highschool）に参加者を限定せず、選考試験がおこなわれた。（中学3年から参加可能）。会場は大学のキャンパスを利用した。

▷IBOは、HP等を通して高校教師等呼びかけ、問題作成をおこなった。

なお、IBOについて、下記の意見が出された。

▷日本の生物学を担っていく後継者を育成するためにはこのような企画は必要ではないか。

▷中学・高校の生物教育が専門教師の不足等で問題視されている中、IBOが中高生の生物教育にプラスに働くのであれば、学会連合としても協力する方向で良いのではないか。

<学会連合としての後援等について>

・学会連合に金銭的な負担をかけないことを原則としていただきたい。

・各学会が個別に後援に名を連ねるのは問題ない。

・学会連合が後援に名を連ねるかは、今年の夏までにはメール等で承認可否を問う予定である。

5. その他

次の連絡会議は、11月に開催される予定である。

（文責：生科連事務局）

11) 遺伝学談話会記録

- ①趣旨と目的 遺伝学は“親から子への”あるいは“世代から世代への”遺伝情報伝達のルールやその物質的基盤を明らかにする学問分野です。そのような観点から考えれば、遺伝情報分子DNAの二重螺旋構造の解明や遺伝暗号の解読が成し遂げられた時点で、遺伝学は完成したという見方があります。しかし、古典力学と同じように、学問としての重要性や意義が少なくなったわけではありません。事実、今日の遺伝学は生命現象の統一的理解を試みる上で必須の基礎学問となっています。問題は、ポスト・シークエンスという新しい時代における遺伝学研究の重要性、意義あるいは将来像が見えにくくなっていることです。そのため遺伝学自体が低迷している印象を与えています。このことは、次代を担う若い人々が特に顕著に感じているのではないのでしょうか。遺伝学の面白さとは、遺伝学研究の将来的な方向とは、また現代社会の直面する様々な課題の解決に対して遺伝学はどのような貢献ができるか、更には自然と対峙してきた20世紀型の自然観・生命観に新しい視点をもたらすことができるかなど課題はさまざまです。本遺伝学談話会は、遺伝学の教育研究における課題を浮き彫りにし、その解決の方向を議論、模索する場として開催します。受講者と講師の双方向の対話を大切に、活気溢れる学びの場を志します。

- ②概要 遺伝学談話会では上記の目的を達成するために、現在活躍されている遺伝学者の方に基調講演をいただき、講演後に講師と参加者による自由闊達な意見交換を行います。このような意見交換を有意義なものとするため、談話会は宿泊施設の附随する大学あるいは研究所をお借りして全国規模で開催します。また、談話会は講演会や議論の場を設定するのみならず、新しい時代の遺伝学研究を志す若手研究者や学生からの要望を積極的に取り入れた運営を目指し、オーダーメイドの遺伝学教育を支援します。さらに、講演や意見交換の記録を整理し、学会内のみならず他分野の多くの研究者への情報発信を目指します。

主催は、日本遺伝学会

運営責任者は、日本遺伝学会将来計画幹事 高畑 尚之

開催頻度：隔月

③開催記録

第1回 平成17年7月8日 総研大先導科学研究科棟（葉山）

「基礎集団遺伝学」高畑 尚之（総研大）

第2回 平成17年8月19日 総研大先導科学研究科棟（葉山）

「集団遺伝学教育の問題点」田島 文生（東大）

第3回 平成17年11月18日 総研大先導科学研究科棟（葉山）

「あやふやな生命現象に挑む遺伝学」城石俊彦（遺伝研）

第4回 平成18年2月3日 総研大先導科学研究科棟（葉山）

「野生マウスに学ぶ遺伝学—新しいバイオリソース」森脇和郎（理研）

第5回 平成18年5月12日 奈良先端大学院大

「植物に特有の進化戦略」田坂 昌生（奈良先端大）

「自然突然変異の起源」真木 寿治（奈良先端大）

第6回 平成18年7月7日 日本学士会館（神田）

「新しい博物学—オサムシの研究から」大澤省三（名大名誉教授）

第7，8回：年内に九大，葉山にてそれぞれ開催を検討中（高畑）

12) 協力委員会

同位元素協会委員 蓮沼 仰嗣

自然史学会連合委員 館野 義男

生物科学学会連合委員 城石 俊彦

13) 2007・2008年度会長・評議員選挙結果：

会 長	
	品川日出夫
次 点	五條堀 孝
評議委員	
全 国 区	定数10名
	斎藤 成也 田嶋 文生 河野 重行 館田 英典 森 郁恵 遠藤 隆 高畑 尚之 井上 弘一 仁田坂英二 堀内 嵩
次 点	品川日出夫 平野 博之 倉田 のり 小林 一三 角谷 徹仁
北海道地区	定数2名
	鈴木 仁 山元 大輔 金澤 章 山本 博章
次 点	松本 健一 武藤あきら
関東地区	定数2名
	篠崎 一雄 小林 一三 阿部 訓也 田村浩一郎
次 点	荻原 保成 平野 博之
中部地区	定数2名
	城石 俊彦 篠原 彰 石浦 正寛 原島 俊
次 点	館野 義男 林 茂生
中国・四国地区	定数2名
	村田 稔 藤 博幸 香川 弘昭 矢原 徹一
次 点	松尾 義則 柴田 弘紀
九州地区	定数2名
	藤 博幸 矢原 徹一
次 点	柴田 弘紀

日本遺伝学会選挙管理委員会（2006）

上田 龍（委員長），田村 勝，高橋 亮

2007・2008年度日本遺伝学会会長および評議員選挙投票率

	有権者数	投票者数	会長	全国区	地方区
北海道地区	41	6	6	6	6
東北地区	50	7	7	7	7
関東地区	257	50	49	49	49
東京地区	132	24	24	22	22
中部地区	174	38	38	36	37
関西地区	186	33	32	32	31
中国・四国地区	100	20	20	20	20
九州地区	89	13	13	13	12
合 計	1029	191	189	185	184
投票率（%）		18.6	18.4	18	17.9

14) 外国名誉会員名簿および国内名誉会員名簿

外国会員

氏 名	住 所
BENZER, S.	Division of Biology, California, Institute of Technology Pasadena, California 91125, U. S. A.
BRENNER, S.	The Salk Institute of Biological Studies, P.O. Box 85800, San Diego, CA 92186-5800, U. S. A.
CROW, J. F.	24 Glenway Street Madison, WI 53705, U. S. A.
GILES, N. H.	Genetics C314 Life Sciences Bldg. U.G.A. Athens, GA 30601 U.S.A.
JACOB, F.	Laboratoire de Genetique Cellulaire, Institute Pasteur, Paris XV, Paris, FRANCE
KORNBERG, A.	Department of Biochemistry, School of Medicine, Stanford University, Stanford, California 94305, U. S. A.
LEDERBERG, J.	The Rockefeller University, 1230 York Avenue, New York, New York 10021, U. S. A.
LYON, M. F.	MRC Radiobiology Unit, Harwell, Didcot, Oxon Oxii, ORD, UK
NEI, M.	Institute of Molecular Evolutionary Genetics, 328 Mueller Laboratory, Pennsylvania State University, University Park, Pennsylvania 16802, U.S.A.
PAL, B. P.	Indian Agricultural Research Institute, New-Delhi, INDIA
STRAUSS, B. S.	Department of Molecular Genetics and Cell Biology, The University of Chicago, 920 East 58th Street Chicago, Illinois 60637, U. S. A.
SUEOKA, N.	Department of Molecular, Cellular and Dvelopmental Biology, University of Colorado Campus Box 347, Boulder, Colorado 80309-0347, U.S.A.
TAN, C. C.	Institute of Genetics, Fudan University, Shanghai, People's Republic of CHINA
TONEGAWA, S.	Center for Cancer Research, Massachusetts Institute of Technology, 77 Massachusetts Avenue, Cambridge, Massachusetts, 02139, U. S. A.
WATSON, J. D.	Cold Spring Harbor Laboratory, P. O. Box 100, Cold Spring Harbor, New York 11724, U.S.A.

国内会員

氏 名	連 絡 先
樋 渡 宏 一	宮城県仙台市青葉区台原2丁目6-8
飯 野 徹 雄	東京都杉並区上荻2-33-12
石 川 辰 夫	東京都練馬区桜台2-25-2
近 藤 宗 平	大阪府羽曳野市羽曳が丘6-2-13
中 田 篤 男	大阪府豊中市東豊中町6-24-1-201
大 澤 省 三	広島市東区牛田旭2丁目4番7-1003
大 島 長 造	大阪市天王寺区上本町9丁目2-7-1317
大 嶋 泰 治	大阪府高槻市日吉台二番町6-5
小 関 治 男	京都市左京区岩倉三宅町380-22
坂 口 文 吾	福岡市西区豊浜1-5-16
田 中 隆 莊	広島市安佐南区長楽寺3丁目1-5
田 島 弥太郎	東京都国分寺市光町1-3-8
富 澤 純 一	静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所
常 脇 恒一郎	兵庫県神戸市西区春日台6丁目14-10
由 良 隆	京都市左京区修学院狭間町12

15) 木原賞，奨励賞受賞者一覧

日本遺伝学会木原賞受賞者一覧表

回	年	受 賞 者	研 究 題 目
1	第55回大会	1983(昭58) 大野 乾 (City of Hope Research Institute)	性決定機構の進化への貢献
2	第56回大会	1984(昭59) 本庶 佑 (京都大学医学部)	抗体遺伝子の構造と発現機構に関する研究
3	第57回大会	1985(昭60) 由良 隆 (京都大学ウイルス研究所)	熱ショック蛋白質合成の遺伝的制御
4	第58回大会	1986(昭61) 近藤 宗平 (近畿大学原子力研究所)	突然変異の機構
5	第59回大会	1987(昭62) 大澤 省三 (名古屋大学理学部)	生物系統進化の分子遺伝学的研究
6	第60回大会	1988(昭63) 利根川 進 (Massachusetts Inst. of Technology)	免疫分子遺伝学における先駆的研究
7	第61回大会	1989(昭64) な し	
8	第62回大会	1990(平 2) 根井 正利 (ペンシルバニア州立大学)	分子進化の集団遺伝学的研究
9	第63回大会	1991(平 3) な し	
10	第64回大会	1992(平 4) 関口 睦夫 (九州大学生体防御医学研究所)	DNA 修復と突然変異の制御機構
		常脇恒一郎 (京都大学農学部)	コムギおよびエギロプス属における細胞質ゲノムの遺伝的多様性
11	第65回大会	1993(平 5) 中田 篤男 (福山大学薬学部)	大腸菌リン酸レギュロンの研究
		志村 令郎 (京都大学理学部)	RNA プロセシングの分子遺伝学的研究
12	第66回大会	1994(平 6) 岡田 益吉 (筑波大学生物学系)	ショウジョウバエ生殖細胞分化決定因子の研究
13	第67回大会	1995(平 7) 堀田 凱樹 (東京大学大学院)	ショウジョウバエ行動制御系の分子遺伝学的研究
14	第68回大会	1996(平 8) 宮田 隆 (京都大学理学部)	真核生物の起源に関する分子進化学的研究
		大嶋 泰治 (関西大学)	酵母におけるシグナル伝達と遺伝子発現制御機構の研究
15	第69回大会	1997(平 9) 杉浦 昌弘 (名古屋大学遺伝子実験施設・教授)	葉緑体ゲノムの分子遺伝学的研究
		小川 英行 (大阪大学理学部・教授)	相同的組換えの普遍的機構の研究
16	第70回大会	1998(平10) 大坪 栄一 (東京大学分子細胞生物学研究所・教授)	転移性遺伝因子の分子遺伝学的研究
17	第71回大会	1999(平11) 長谷川政美 (統計数理研究所・教授)	分子系統樹推定法の開発とその応用
		小川 智子 (国立遺伝学研究所・教授)	遺伝子組換えの分子機構の解析 —特に真核細胞の特性と機能について—
18	第72回大会	2000(平12) 平賀 壯太 (熊本大学・教授)	大腸菌染色体およびプラスミドの分配機構
19	第73回大会	2001(平13) 品川日出夫 (大阪大学・教授)	DNA 修復と組換えの分子機構に関する研究
20	第74回大会	2002(平14) 高木 信夫 (北海道大学・教授)	哺乳類 X 染色体の不活性化
21	第75回大会	2003(平15) 高畑 尚之 (総合研究大学院大学・教授)	Molecular population genetics and speciation model
22	第76回大会	2004(平16) な し	
23	第77回大会	2005(平17) 五條堀 孝 (国立遺伝学研究所・教授)	ゲノムの比較解析に基づく進化遺伝学的研究
24	第78回大会	2006(平18) 岡田 典弘 (東京工業大学大学院・教授)	レトロポゾンを用いることによる生物進化の機構解明への新しいアプローチ

日本遺伝学会奨励賞受賞者一覧表

回	年	受 賞 者	研 究 題 目
1 第55回大会	1983(昭58)	宮田 隆 (九州大学理学部)	真核生物における DNA の進化の研究
		池村 淑道 (京都大学理学部)	遺伝子におけるコドン使用頻度と細胞内 tRNA 量との相関について
2 第56回大会	1984(昭59)	高木 信夫 (北海道大学理学部)	X 染色体の不活性化に関する細胞遺伝学的研究
		堀 寛 (名古屋大学理学部)	5 S リボゾーム RNA の分子進化からみた生物界の系統
3 第57回大会	1985(昭60)	下遠野邦忠 (国立がんセンター研究所)	レトロウィルスの複製及び遺伝子の発現に関する研究
		宇野 功 (東京大学応用微生物研究所)	細胞増殖における環状アデニル酸の役割 (宇野・松本会員の共同研究)
		松本 邦弘 (鳥取大学工学部)	
4 第58回大会	1986(昭61)	高畑 尚之 (国立遺伝学研究所)	分子レベルにおける集団遺伝学の数理的研究
		岡田 典弘 (筑波大学生物科学系)	tRNA を起源とする反復配列に関する研究
5 第59回大会	1987(昭62)	五條堀 孝 (国立遺伝学研究所)	遺伝子の塩基配列比較による分子進化の研究
		篠崎 一雄 (名古屋大学遺伝子実験施設)	葉緑体ゲノムの構成と起源に関する研究
6 第60回大会	1988(昭63)	な し	
7 第61回大会	1989(平元)	西田 育巧 (愛知県がんセンター研究所)	ショウジョウバエをモデル動物とした発癌遺伝子の生物学的機能の研究
		遠藤 隆 (奈良大学)	コムギに対する配偶子致死遺伝子の発見とその作用に関する細胞遺伝学的研究
8 第62回大会	1990(平2)	岡田 清孝 (基礎生物学研究所)	シロイヌナズナを用いた高等植物の分子遺伝発生学
		松浦 悦子 (お茶の水女子大学)	ショウジョウバエにおけるミトコンドリア伝達とその制御機構の研究
9 第63回大会	1991(平3)	谷村 禎一 (九州大学教養部生物学教室)	ショウジョウバエ行動突然変異の遺伝子解析
		島本 功 (植物工学研究所)	培養系を用いた高等植物、特にイネの遺伝的改変
10 第64回大会	1992(平4)	牧野 耕三 (大阪大学微生物病研究所)	原核生物のシグナルトランスダクション：大腸菌リン酸レギュロンの制御機構
		城石 俊彦 (国立遺伝学研究所)	マウス MHC 領域における遺伝的組換えホットスポット
11 第65回大会	1993(平5)	田嶋 文生 (国立遺伝学研究所)	DNA 多型に関する統計的研究
		上田 龍 (三菱化成生命科学研究所)	ショウジョウバエにおける感覚器形成の発生遺伝学的研究
12 第66回大会	1994(平6)	真木 寿治 (奈良先端科学技術大学院大学)	自然突然変異の制御機構
		杉田 護 (名古屋大学)	ラン藻の RNA 結合蛋白質の分子遺伝学的研究

回	年	受 賞 者	研 究 題 目
13 第67回大会	1995(平7)	大矢 禎一 (東京大学大学院)	出芽酵母におけるカルシウム制御系の分子遺伝学的研究
		斎藤 成也 (国立遺伝学研究所)	系統樹作成法の開発を中心とする分子進化学の研究
14 第68回大会	1996(平8)	森 郁恵 (九州大学理学部)	線虫 <i>C. エレガンス</i> における温度走性の分子神経遺伝学的研究
		松田 洋一 (名古屋大学農学部)	野生ハツカネズミ種の遺伝的変異に関する細胞遺伝学的研究
15 第69回大会	1997(平9)	仁田坂英二 (九州大学理学部・助手)	キイロシヨウジョウバエにおけるトランスポゾンの転移機構と進化
16 第70回大会	1998(平10)	颯田 葉子 (総合研究大学院大学・助教授)	MHC 遺伝子の進化集団遺伝学的研究
		梅津 桂子 (奈良先端科学技術大学院大学・助手)	遺伝的組換えに関する遺伝子群の機能解析
17 第71回大会	1999(平11)	林 茂生 (国立遺伝学研究所・助教授)	シヨウジョウバエ発生 の 遺 伝 学 的 研 究
18 第72回大会	2000(平12)	蘇 智慧 (JT 生命誌研究館・研究員)	ミトコンドリア DNA によるオサムシの系統進化に関する研究
		若杉 達也 (富山大学・助教授)	葉緑体の RNA エディティングに関する研究
19 第73回大会	2001(平13)	坂本 亘 (岡山大学資源生物科学研究所・助教授)	シロイヌナズナの「斑入り」突然変異に関する分子遺伝学的研究
		岩崎 博史 (横浜市立大学・助教授)	微生物の遺伝的相同組換えの分子機構
20 第74回大会	2002(平14)	関根 靖彦 (立教大学・助教授)	転移性遺伝因子 IS の転移とその制御の分子機構
		深川 竜郎 (国立遺伝学研究所・助教授)	高等脊椎動物の染色体分配機構に関する研究
21 第75回大会	2003(平15)	印南 秀樹 (テキサス大学ヒューストン校・助教授)	DNA 多型の維持機構に関する理論的研究
		田村浩一郎 (東京都立大学・助手)	塩基配列進化の理論的研究
22 第76回大会	2004(平16)	小林 武彦 (基礎生物学研究所)	真核生物リボゾーム RNA 遺伝子増幅の分子機構
		松永 幸大 (大阪大学大学院工学研究科応用生物学専攻)	植物性染色体の分子遺伝学的解析
23 第77回大会	2005(平17)	那須田周平 (京都大学大学院・助手)	コムギ及び近縁種染色体の分子細胞遺伝学的解析
		木下 哲 (国立遺伝学研究所・助手)	植物のインプリンティングの制御機構
24 第78回大会	2006(平18)	佐渡 敬 (国立遺伝学研究所・助手)	X 染色体不活性化の分子機構
		鈴木 善幸 (国立遺伝学研究所・助手)	自然選択検出法の開発と応用

16) 日本遺伝学会歴代会長

歴代	氏 名	主 たる 職	存 任 期 間
1	池野成一郎 慶應2年5月13日生	東京帝国大学教授（農学部）	自 昭和3年1月1日 至 昭和9年12月31日
2	藤井健次郎 慶應2年10月2日生	東京帝国大学教授	自 昭和10年1月1日 至 昭和11年12月31日
3	小熊 捍 明治18年8月24日生	北海道帝国大学教授	自 昭和12年1月1日 至 昭和12年12月31日
4	寺尾 博	東京農林省農事試験場	自 昭和13年1月1日 至 昭和13年12月31日
5	田中 義麿 明治17年10月6日生	九州帝国大学教授	自 昭和14年1月1日 至 昭和15年12月31日
6	小熊 捍 明治18年8月24日生	北海道帝国大学教授	自 昭和16年1月1日 至 昭和16年12月31日
7	駒井 卓 明治19年5月9日生	京都帝国大学教授	自 昭和17年1月1日 至 昭和17年12月31日
8	山口 弥輔	東北帝国大学教授	自 昭和18年1月1日 至 昭和18年12月31日
9	木原 均 明治26年10月21日生	京都帝国大学教授	自 昭和19年1月1日 至 昭和19年12月31日
10	古畑 種基	東京医科歯科大学教授	自 昭和20年1月1日 至 昭和20年12月31日
11	増井 清 明治20年9月14日生	東京帝国大学教授	自 昭和21年1月1日 至 昭和22年12月31日
12	木原 均 明治26年10月21日生	京都帝国大学教授	自 昭和23年1月1日 至 昭和27年12月31日
13	篠遠 喜人 明治28年2月20日生	東京大学・教授 国際キリスト教大学	自 昭和28年1月1日 至 昭和33年12月31日
14	和田 文吾 明治33年12月18日生	東京大学教授	自 昭和34年1月1日 至 昭和35年12月31日
15	森脇大五郎 明治39年10月12日生	東京都立大学学長	自 昭和36年1月1日 至 昭和39年12月31日
16	吉川 秀男 明治41年3月11日生	大阪大学教授	自 昭和40年1月1日 至 昭和43年12月31日
17	田中 信徳 明治43年8月11日生	東京大学教授	自 昭和44年1月1日 至 昭和47年12月31日
18	田島弥太郎 大正2年9月26日生	国立遺伝学研究所所長	自 昭和48年1月1日 至 昭和51年12月31日
19	大島 長造 大正5年2月7日生	国立遺伝学研究所教授	自 昭和52年1月1日 至 昭和55年12月31日
20	木村 資生 大正13年11月13日生	国立遺伝学研究所教授	自 昭和56年1月1日 至 昭和59年12月31日
21	小関 治男 大正14年11月20日生	京都大学教授	自 昭和60年1月1日 至 昭和61年12月31日
22	飯野 徹雄 昭和3年8月12日生	東京大学教授	自 昭和62年1月1日 至 昭和63年12月31日
23	常脇恒一郎 昭和5年11月26日生	京都大学教授	自 平成1年1月1日 至 平成2年12月31日
24	森脇 和郎 昭和5年11月4日生	国立遺伝学研究所教授	自 平成3年1月1日 至 平成6年12月31日
25	関口 睦夫 昭和7年6月3日生	九大・生体研・所長 福岡歯科大・教授	自 平成7年1月1日 至 平成10年12月31日
26	堀田 凱樹 昭和13年9月20日生	国立遺伝学研究所所長	自 平成11年1月1日 至 平成14年12月31日
27	石和 貞男 昭和11年7月8日生	お茶の水女子大学名誉教授	自 平成15年1月1日 至 平成18年12月31日

日本遺伝学会規約集抜粋

1) 日本遺伝学会会則

- 第1条 本会は日本遺伝学会と称する。
- 第2条 本会は遺伝に関する研究を奨め、その知識の普及を計ることを目的とする。
- 第3条 本会は事務所を静岡県三島市谷田、国立遺伝学研究所内におく。
- 第4条 本会に入会しようとするものは住所、氏名および職業を明記して本会事務所に申し込むこと。
- 第5条 本会会員は普通会员、機関会員、賛助会員および名誉会員とする。毎年普通会员は会費10,000円（ただし在学証明書またはそれに代わるものを提出したときは6,000円）を、機関会員は15,000円を、賛助会員は1口（20,000円）以上を前納すること。会員で会費滞納1年におよぶものは資格を失うものとする。
- 第6条 本会は次の者を総会の決議により名誉会員とすることができる。
本会に功労のあった者、外国の卓越した遺伝学者。
- 第7条 本会は隔月1回遺伝学雑誌を発行して会員に配布する。
- 第8条 本会は毎年1回大会を開く。大会は総会と講演会とに分け、総会では会務の報告、規則の改正、役員の選挙および他の議事を行い講演会では普通会员および名誉会員の研究発表をする。
大会に関する世話は大会委員若干名によって行い、大会委員長は会長が委嘱する。大会は臨時に開くことがある。
- 第9条 本会は各地に談話会をおくことができる。
- 第10条 本会は会長1名、幹事若干名、会計監査2名の役員、および評議員若干名をおく。
1) 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
2) 会長は、評議員が全普通会员の中から選出した複数の候補者から普通会员による直接選挙によって選出される。
3) 評議員は、普通会员による直接選挙で選出される。
4) 幹事は、会長が推薦する候補会員を評議員の過半数が承認することにより選任される。
5) 会計監査は、会長が推薦する候補会員を評議員の過半数が承認することにより選任される。
6) 会長は評議員会を招集し、その議長を務める。幹事は評議員会に出席するものとする。
7) 評議員会は、会員を代表して、事業計画、経費の収支、予算・決算、学会誌の発行、大会の開催、その他重要事項について審議し、出席評議員の過半数をもって議決する。
8) 会長ならびに幹事により幹事会を構成し、会長がこれを代表する。
9) 幹事会は、学会の関連事項を論議し評議員会に諮ると共に、会務を執行する。
10) 会計監査は、学会の会計を監査する。
- 第11条 役員および評議員の任期は2カ年とする。会長および評議員は連続三選はできない。
- 第12条 本会の事務年度は暦年による。
- 付則 平成7年10月13日に第5条を改正し、平成8年1月1日から施行する。

2) 会長および評議員選挙に関するおぼえがき（平成17年9月26日改正）

- (1) 会長および評議員選挙にあたり、会長は選挙管理委員数名を委嘱し、選挙の管理を担当させる。
- (2) 会長の選挙にあたっては、評議員の投票によって候補者を3名選び、これを全会員に通知し、単記無記名投票を行い、その最多得票者を当選者とする。いずれの投票においても、同数得票者があった場合は年少順とする。
- (3) 評議員は全国を8地区に分け、各地区所属の普通会员の互選による地区評議員と全普通会员の互選による全国区評議員に分ける。地区評議員の定数は各地区2名、全国区評議員の定数は10名とする。評議員の選挙は無記名投票とし、地区評議員は2名連記、全国区評議員は10名連記とする。
同一人は地区評議員と全国区評議員と同時に選ばれた場合には、全国区を優先当選とし、当該地区評議員は次点者を繰り上げる。同数得票者があった場合は年少順とする。

- (4) 幹事は評議員を兼任することができない。
- (5) 任期中に会長が辞任または評議員に欠員を生じた場合は新たに選挙は行わず前回選挙の際の次点者を繰り上げる。その任期は残任期間とする。
- (6) 選挙当年の5月31日に普通会員であるものは、会長および評議員の被選挙権を有する。投票締め切りの2週間前に普通会員であるものは、会長および評議員に対する選挙権を有する。
- (7) 上記以外の問題が生じたときは、選挙管理委員会で処理する。ただし、選挙管理委員会は、解散時に処理内容を会長に報告しなければならない。

3) 日本遺伝学会特別功労賞内規

1. 目 的 遺伝学ならびに日本遺伝学会の発展に顕著な貢献をし、さらに一般社会への遺伝学の啓蒙普及にもおおいに成果をあげた者（原則として会員）にたいし、本会はその功労を讃えかつ感謝の意を表すために特別功労賞を設定する。
2. 賞の内容 賞状及び記念品。
3. 賞の選考 賞の対象となる場合が生じたときは、会長が発議して幹事会を招集し慎重に審査を行い、受賞者を決定したうえで評議員会の承認を得るものとする。
4. 賞の贈呈 該当する年度の日本遺伝学会大会において贈呈式を行う。
5. 施 行 本内規は、評議員会の承認を得て施行するものとし、平成15年度第2回評議員会（平成15年9月23日）にて承認された。

4) 日本遺伝学会学会賞および奨励賞に関する規定

(目的)

遺伝学の進歩を促し、すぐれた研究業績を一般に知らせるために学会賞および奨励賞を設定する。

(賞の種類)

1. 日本遺伝学会木原賞
遺伝学の分野ですぐれた業績をあげた者（原則として会員）に授与する。
(註1参照)
2. 日本遺伝学会奨励賞
遺伝学の特定の分野ですぐれた研究を活発に行い、将来の成果が期待される比較的若い研究者（原則として40才以下の会員）に授与する。

(賞の内容)

1. 日本遺伝学会木原賞
賞状、メダルおよび副賞としての賞金からなる。(註2参照)
2. 日本遺伝学会奨励賞
賞状および副賞としての賞金からなる。(註3参照)

(賞の選考)

賞の存在が有益であるためには、公正適切な選考を行なうことが不可欠である。これを考慮して選考委員会の規定および選考方法を定めるものとする。

1. 選考委員会
全会員を対象として評議員会により選出された若干名と、これに会長が加わり、選考委員会を構成する。会長以外の選考委員は任期を2年とし、連続して2期（4年）をこえ選考委員としてとどまることはできない。選考委員の委員長は会長がつとめるものとする。(註4・註6参照)
2. 選考方法
会員から推薦された候補者について選考委員が慎重に審査を行い、受賞者を決定した上で評議員会の承認を得るものとする。日本遺伝学会木原賞受賞者については原則として各年1名とするが、適当な候補者がいない場合は授賞は行わないものとする。
日本遺伝学会奨励賞については各年2名以内を選ぶものとする。(註5参照)

(註1) 従来の遺伝学会賞とは内容的に異なるので、この際、日本遺伝学会が世界に誇ることで、当学会にも絶大な功績のあった木原均名誉会員の名前をつけ、同氏を顕彰記念する意味も含めるものとする。

- (註2) 日本遺伝学会木原賞基金を設定し、メダル製作の費用および副賞20万円をこれから支出するものとする。
- (註3) 賞金は1件5万円とし会費よりまかなうものとする。
- (註4) この規定制定の基礎となった考えは次のような点である。選考委員会委員の選出は評議員の互選とすることは必ずしも適切と考えられない。純粋に賞の選考だけを目的とする行事の最適者を選ぶという理由で全会員から選ぶ。選考委員会設定のための投票においては散票を防ぐために二段階投票を行い、また、選考委員会委員の過半数が現評議員によって占められることを避けるための調整も行なうべきである。
- (註5) 選考の公正を期する上で選考委員の中から受賞者が出ることは望ましくないで、絶対避けるべきである。その他選考に当たっては、賞の授与が多く会員から高い評価を受けるよう常に心掛けるべきで、そのためには他学会などでの選考過程で見習うべきものは取り入れ、その他有用な情報を選考委員が学ぼう努めるべきであろう。特に日本遺伝学会木原賞は毎年必ず出すといった性格はとらず、真にふさわしいと認められる候補者の存在する時だけ授与するものとする。なお、業績の判定には候補者の発表論文を充分吟味し、さらに国際性を重視するように Science Citation Index などの客観的資料をできるだけ参考にし、国内外の当該分野の著名な学者の意見も聞くことが望ましい。また、過去1、2年の発表論文の価値を早急に判断することは避ける。
- (註6) 日本遺伝学会木原賞及び奨励賞選考委員選出方法について
- 1) 選考委員会は、評議員より3名、評議員以外の一般会員より3名と会長を加えて7名より構成する。
 - 2) 委員は、評議員会で選出する。選挙方法は、別に定める。
 - 3) 幹事には、被選挙権がない。
- ＜選挙方法＞
- (i) 投票は2回に分けて行なう。
 - (ii) 投票は、評議員外より3名、評議員より3名の候補者を連記する。
 - (iii) 第一次投票のそれぞれ上位10名を、第二次投票の候補者とする。
 - (iv) 同数得票者があった場合は年少順とする。
- (註7) 審査の公正を期する措置によって、審査に参加できない委員が生じた場合は、審査委員長（会長）は補充のため当該審査に限り新たに委員を委嘱することが出来る。
- ＜補足＞
- 「日本遺伝学会賞および奨励賞に関する規定」を踏まえて、特に
- (1) 「選考委員が学会賞または奨励賞の候補者となった場合は、いずれの審査にも加わらない」
 - (2) 「選考委員は、同じ研究グループに属する候補者の審査には加わらない」
 - (3) 「選考委員が学会賞または奨励賞の推薦者となった場合は、当該審査には加わらない」

附 則

昭和57年11月20日	日本遺伝学会総会承認
昭和60年10月14日	一部改正（註2のただし以下）
昭和63年2月6日	一部改正（註6）
1989年10月14日	一部改正 日本遺伝学会総会承認
1992年10月23日	一部改正（註7）追加
2005年4月4日	一部改正（註2）、＜選挙方法＞ および＜補足＞

2007年度情報・システム研究機構国立遺伝学研究所

博士研究員募集

募集人員： ポスドク 10名程度

応募資格： ①博士の学位を取得した者又は博士の学位取得が確実な者
②本研究所の研究プロジェクトを推進するために必要な研究能力を有する者

雇用期間： 2007年4月1日～2008年3月31日
(継続の申請と審査を経て1年間更新可能)

待遇： 本研究所の規程に基づき決定 (年俸400万円程度／税込)

社会保険適用, 裁量労働制

提出書類： ①履歴書,
②これまでの研究内容の要旨,
③発表論文リスト,
④研究課題及び研究計画, 推薦者名 (受入先の本研究所研究教育職員),
⑤推薦者による意見書

応募締切： 2006年12月15日(金) 17時必着

提出方法： 電子メールに応募書類を添付して連絡先のアドレスに送信願います。

連絡先： 情報・システム研究機構国立遺伝学研究所研究推進室研究協力係
Email: kenkyo-mail@lab.nig.ac.jp TEL 055-981-6711

※応募前に必ず本研究所のホームページ (<http://www.nig.ac.jp>) にある募集要項を読み、
詳細をご確認ください。

大学共同利用機関法人情報・システム研究機構
国立遺伝学研究所

管理部総務課研究協力係 山本 千織

〒411-8540 静岡県三島市谷田1111

TEL : 055-981-6711

FAX : 055-981-6715

E-mail : kenkyo11@lab.nig.ac.jp



◆著作権処理について◆

平成18年 8 月
独立行政法人科学技術振興機構
文献情報部 電子ジャーナル課

0. はじめに

独立行政法人科学技術振興機構（JST）では、平成17年度から日本の学協会等が発行する学術雑誌を創刊号まで遡って電子化しインターネット公開する電子アーカイブ事業を行っております。電子アーカイブ化を行うにあたって、学協会がJSTに自らの保持する著作権の許諾を行って頂くことが必要となり、前提として学協会が著者から権利譲渡・許諾を受けておく必要があります。このような電子アーカイブに関する著作権処理については、学協会の皆様からお問い合わせをいただくこともあり、JSTで調査し、一般的な留意点を取りまとめましたので、ご参考にしていただければ幸いに存じます。

1. 著作権についての基本的な考え方

論文の著作権は元来、著者にありますが、著作権法61条や63条にある通り、著作者財産権の部分は第三者に譲渡や利用許諾を行うことができます。近年では、学会誌に公表される論文については、その著作権を学会が著者から譲り受けることが慣行として確立しており、その結果、学協会が著作権者となっている場合が多く見られます。しかしながら、学会誌公刊の初期には、そのような慣行がまだ明確化しておらず、少なくとも書面上で著作権を論文の著者から譲り受けたかどうかが明確ではないものも存在しているようです。たとえば、投稿規定に著作権が学会に帰属することを明記している場合、或いは投稿時・採択時に書面で著作権譲渡の書面を著者と学会との間で取り交わしている場合には、著作権が学会に帰属していると言えますが、これら手続きがされていない場合、法的には、著作権は著者に帰属すると推定することが安全であるといえます。著者が既に亡くなっている場合でも、死後50年を経過するまでは著者の相続人が著作権を保有していることになります。

電子アーカイブ事業で論文をJSTが電子化し、Journal@rchiveでインターネット公開するためには、著作権のうち特に複製権と公衆送信権（送信可能化権も含む）の行使を著作権者からJSTに許諾頂く必要があります。論文の著作権が学協会に帰属しているものについては、権利者である学協会とJSTとの間で、これらの必要な権利の許諾に関する覚書を締結して電子アーカイブ事業を進めてまいります。

公開の対象となる論文の中で、論文の著作権が著者に帰属している場合（学会と著者で共有している場合も含む）、もしくは著作権が学協会に帰属しているかどうか不明確ではない場合には、著者にこれらの利用に関してJSTに許諾をいただく（または、学協会からJSTに再許諾することをご承諾いただく）ことが法律上必要である、または安全であるといえます。（ただし、著作権譲渡がされていなくとも学会が複製、公衆送信を行うことが著者に許諾されており、更に第三者に対し、再許諾を行えることが著者との間で合意されている場合にも電子アーカイブ事業を行う上で問題はございません。）

2. 著作権が著者に帰属する場合の手続きについて

論文の著作権が著者に帰属している場合（学会と著者で共有している場合も含む）、もしくは著作権が学協会に帰属しているかどうか不明確ではない場合には、基本的に電子化を行いたい論文の著者（またはその相続人）に連絡を取り、著作権譲渡に同意してもらうか、或いはJSTが行う電子化の許諾に同意してもらうことが必要です。そのため、原則としては、著者（またはその相続人）の現在の連絡先を調査し、譲渡または許諾の申し入れをし、その意思を確認する作業が必要になります。ただし、このような論文はいずれも、古い論文が多いため、現在の権利者の連絡先を調査することが困難を極める場合がございます。そのような場合、たとえば、以下のような対応が選択肢として考えられます。

2. 1. 文化庁長官裁定を受ける（略）
2. 2. 学協会の会告で著作権者に呼びかける（略）
 2. 2. 1. 学協会の会告での呼びかけに応じて著作権者が現れた場合の対応について（略）
3. その他

補足ですが、2. 2. で著者と連絡が取れない場合に、Journal@rchiveとしてそういった論文だけを公開しないということも可能です。学協会の皆様におかれましては、論文を網羅的に公開する社会的な意義と、万一、公開の趣旨に賛同できない著者が現れる場合のリスクとを総合的に判断した上で、著作権についての対策をご検討いただけますよう、お願い申し上げます。

以上

◆「科学者の行動規範」（暫定版）等に関する調査◆

表記の依頼が学術会議黒川清会長名で、日本遺伝学会に寄せられました。送付されました調査用紙を評議員・幹事各位に配付し回答を学会長名で依頼しました。約10名から得られました回答を尊重しつつ、最終的には学会長の意見を加味して取りまとめ、以下のように記入しました。今秋には学術会議の「科学者の行動規範」が策定されると思われますが、遺伝学者のコミュニティにおいてもこれを機会に議論が深まることを期待します。（石和）

* * *

日本学術会議は、広く科学者コミュニティ、科学者組織において共有される「科学者の行動規範」を制定したいと考えております。そして、「科学者の行動規範」が、教育・研究機関での倫理教育、産業界・官界組織での導入教育、研究資金提供機関における審査制度、職業研究者一般の意識向上などに活用されることを希望しております。そのような目的を持った「科学者の行動規範」を策定するために、暫定版（GSJコミュニケーションズ81（3）:25頁）について、以下の観点から御意見を御記入ください。

なお、本調査の集計結果及び分析内容については公表する予定ですが、回答機関が判明するような個別情報については公表することはありません。

1. あらゆる科学者組織に共有される「科学者の行動規範」が、科学者個々人の倫理的意識を高め、科学者として適正な行動を促すと思いますか。以下の中からひとつお選びください。

1. 科学者の倫理意識も高め、科学者としての適正な行動も促す
 2. 科学者の倫理意識は高めるが、科学者としての適正な行動を促すとは限らない
 3. 科学者の倫理意識は高めるとは思えないが、科学者としての適正な行動は促す
 4. 科学者の倫理意識も高めなければ、科学者としての適正な行動も促さない
 5. 分からない
 6. その他（具体的な内容をお書きください）
()

2. 上記1. の選択肢を選んだ理由をお聞かせください。

3. 今後「科学者の行動規範」（暫定版）に対して頂いた御意見を参考に、「科学者の行動規範」（最終版）を作成する予定ですが、貴機関では「科学者の行動規範」（最終版）をどのようにしようあるいは利用しますか。以下の中からひとつ以上お選びください。

1. 行動規範として採用する
 2. 「科学者の行動規範」の趣旨に沿って独自の行動規範や倫理規程を策定する
 3. 引用、あるいは参照して利用する
 4. それ以外の仕方で利用する（具体的な利用の仕方をお書きください）
()
 5. 利用しない
 6. 分からない

4. 上記3. の選択肢を選んだ理由をお聞かせください。

5. 「科学者の行動規範」（暫定版）に、記述が足りない、不適切な、あるいは不要な事項があるでしょうか。自由に御回答ください。

6. 「科学者の行動規範」を多くの科学者に周知徹底するために、どのような方法が最も効果的と考えますか。自由に御回答ください。

7. 「科学者の自律的行動を徹底するために」（別紙2）に関して御意見がありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました。

【本件担当及び送付先】

社団法人輿論（よろん）科学協会 柏木、井田

〒151-8509 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-8-6

TEL：03-3401-1131, FAX：03-3404-0019

〔日本遺伝学会が提出した回答文抜粋〕

1 について： ①

2 について： 1. での設問文中「あらゆる科学者組織に共有される」とあるが、実現することを期待したい、いくつかの研究
者コミュニティないしは学協会において自らのこととして理解し、この規範をもとにした指針・綱領などを策定
する動きが促進されると期待して、①と回答。

ただ規範が作文されても、内容が個々の研究者にしっかりと受け止められることが期待出来ないと考えて④を選
択する意見も、学会内の意見交換の過程で見られた。

3 について： 学会としての意見が収束しにくい設問。当面のアクションとして①を選択。

4 について： より時間をかけて、生命科学ないしは生物科学関連学協会の連携により、独自の内規を策定することが想定され
るので②を選択することも考えたが、とりあえずは①から出発することを考える。

5 について： 行動規範の文言が簡略に過ぎて十分に内容を理解出来ているかどうか理解しにくいところが散見出来る。

たとえば、「利益相反の回避」は重要な内容を含むと思われるが、やや抽象的に過ぎる。個人の自由より上位に公
序が位置する場合があることを確認し、人間の尊厳を規定する倫理原則は今後の科学者倫理において注目すべきボ
イントである。そうした「公」の心を取り戻す力となる「個」との関係を強調していただきたい。

6 について： 周知するというものを限定的にとらえると「周知は既にされているが、実行されていないだけである」との意見
が寄せられてくる。男女共同参画型社会やセクハラ問題はその例としてあげられるだろう。現実には、多くの機関
が罰則を含む厳しい規定を盛り込んで懸命に対処すべく検討している。

あらためて行動規範の前文を読んでみる。ここでは「社会が科学への理解を示し対話を求めるための基本的枠組
み」を考えているという。いわゆる「自己決定」が尊重され肥大した「個」のままでいる自由主義社会の現状を乗
り越える生き方が求められている。具体的には、社会の側が行動規範について審議ないしは協議する複数のチーム
を構成し、学術団体とテーブルを囲む仕組みを考えてみてはどうか。行動規範が内向きにならないように配慮した
い。

また、「研究環境の確立」の公正な環境の確立・維持と、「研究活動」の不正行為が起らない研究環境の整備は
ともに共通の隘路を抱えている。すなわち、現在の先進国社会全体を席卷している商業主義、それに経済格差の拡
大が、研究環境をも支配しつつあると指摘されている。国立大学・機関も法人化され短絡的な競争原理が適用され
るようになって、それが是正されない限り行動規範の遵守は困難ではないかと考える研究者は多い。「ねつ造」は、こ
うした背景を持つ構造的な原因に根ざすものであることを十分に精査して規範の周知徹底を進めなければならない
との意見が少なくない。

7 について： (回答略)

(文責 石和貞男)

◆BP 賞特集号「若手研究者が語る21世紀の遺伝学V」◆

投 稿 規 定

<原稿依頼について>

つくば大会におきましても、「若手研究者が語る21世紀の遺伝学(V)―日本遺伝学会第78回大会 Best Papers 賞」特集号を、
ほぼ前年度と同様の形式で編集を行います。規定により候補者が正式にBP賞受賞者となるためには、この特集号に寄稿されるこ
とが必要です。候補者が選考委員会で決定しましたら、その報告を受けて石和から各候補者に寄稿依頼状をお送りいたしますの
で、どうかご協力下さい。

記

1) GSJ コミュニケーション第81-5号の原稿締切りは、10月31日(火)必着を予定。

2) 原稿は原則としてワードファイルの添付文書にまとめメールにて送稿。

ただし都合により直接、原稿をレタープレス宛送っていただくことがあります。

① タイトルと所属(発表講演と同じ)をつけて、原則として講演発表者によっ
て書かれた原稿をお寄せ下さい。なおシニヤースタッフが講演発表者となられ
た場合はなるべく共著者の若手研究者に原稿執筆の機会をお譲りいただきご指
導下さい。共著者の氏名・所属にミスがないように、ご確認下さい。

② 発表講演の概要、その背景・独創性、今後の展開、抱負など、全体として、1
,000字程度。専門が異なる者にも理解出来るよう、平易に記述して下さい。た
だし、図表の大きさを考慮して字数は勘案して下さい。色覚バリエーションの
配色を心がけて下さい。

③ 参考図/表を3枚程度(印刷はカラーで行います。また図表の説明は、それ



それになるべく詳しく記入して下さい。)

④ 共著者全員の集合写真(氏名の表示付)を必ず付けてください。およそ名刺大に印刷の予定。

⑤ 引用文献は最少に。

3) 図・表・写真は郵送も可、遺伝学会事務局内 石和宛。

4) 発行は本誌と共に11月中/下旬を予定。GGSとともに全会員に配布されます。

5) 希望によって冊子の増刷ができます。(有料)

6) 基本的には、昨年度の冊子に準じた体裁で編集を行います。GSJコミュニケーションズ B5 判 1 ページ/講演とします。

7) 石和(編集責任者) メール宛先 s-shiwa@gf7.so-net.ne.jp

8) 大会のプログラム・講演予稿集所収の城石 BP 賞選考委員長による BP 賞関連記事をご確認下さい。

9) BP 賞受賞者へは、賞状およびクリスタルパーパーウエイトの贈呈、そして特集号増刷が贈られます。

◆会長日々◆ 激動の遺伝学の歴史と共に歩んだ4年を惜しむ

会長の任期もいよいよ終焉の日が近づき、「会長日々」をまず着任から今日までの4大会を振り返るところから、始めてみたいと思います。2003年第75回大会(東北大川内キャンパス)は、私にとりまして思い出多い会長としての初めての大会となりました。本学会として初めて全面的に、あらかじめ設置されたコンピュータおよびプロジェクターを使った講演を実施した山本和生大会委員長の熱意は相当なものでありました。講演者も新しいシステムにすぐに対応して、IT時代の凄さを感じさせられたものです。当時の河野企画・集會幹事と私は、事前に大会会場を巡ね、準備委員の方々に挨拶をして回った記憶は、まだなまなましい。河野幹事は、若手研究者の大会参加を奨励するいろいろな配慮を実行され、学生への旅費援助、BP賞などは現在に受け継がれています。BP賞を通して、評価することの重要さ、困難さも学会は体験しています。第76回大会(大阪大学コンベンションホール、品川日出夫大会委員長)は、会場の設定もすばらしく、大変幅の広いスケールの大きな大会でありました。分子生物学と遺伝学があたかも合体している感がありました。早朝から、昼食時、夕食時簡も巧みに利用して啓蒙的な、ときには先端的な講演をプログラム化され、地元の豊富な研究者陣の指揮をふるわれていたのは、印象的です。会場でお会い出来た近藤宗平、大島長造両名誉会員も楽しそうでありました。第77回大会(国立オリンピック記念青少年総合センター、五條堀大会委員長)は、三島の国立遺伝学研究所の皆様による運営で行われました。出来るだけ多くの会員にアクセスしやすい所をと無理を承知で東京に会場を設定されました。それ自身が新しい発想です。実に沢山のミニシンポジウムを設定されて、遺伝学のこれからに臨む若手研究者を大いに鼓舞される姿勢が伺われました。現在の遺伝学会では比較的層が薄くなっている発生生物学、構造生物学関連分野に鑑み、欧米から優れた研究者を数名招待されて、ある意味で啓蒙的な研究者向けの公開シンポジウムを開催されました。そして、第78回大会(つくば国際会議場、小幡裕一大会委員長)は、つくば地区での開催が決まったときから、永年遺伝学会に貢献されてこれました森脇和郎先生にご相談をし、具体的な陣容をご提案いただきました。先生がそれまで所長であったバイオリソースセンターの皆様を中心に、準備態勢が進みました。周辺には多くの大学、公的な研究機関など存在しておりますので、連絡を取りながら準備に最大限の努力をされ、時間をかけられたと聞いております。プログラムの特徴の一つは、現代遺伝学におけるバイオリソースの意義を、それぞれ代表的な研究者をまじえて議論出来る場を提供されていることでしょう。先日ある紙上で、総合科学技術会議の常勤議員の本庶 佑京大客員教授(遺伝学会会員でもあります)が、以下のように述べられています。「ゲノムが、解読され分析的手法には限界が来た」、「次の課題は、生命現象を生み出すゲノムの総合的な役割の解明。異分野の融合や、斬新な発想の(期待出来る)若手人材の育成がカギだ」。まさに、つくば大会は、このメッセージを目標とした遺伝学会大会となるでまいしょう。正逆遺伝学の融合と単純には表現できない遺伝学の革命が内包されているように思われます。ゲノムデータが集積されるに従って、バイオリソースは遺伝学研究の場に強い緊張感をもたらしつつあります。この大会を機に、遺伝学会は、進取気鋭の会員のコミュニティーとして、ますます活力ある姿を漲らせていくことを祈念します。さらに79回、80回の大会に夢が膨らみます。

さてこの間、遺伝学会幹事の皆様は、会員の信託を受けて様々な努力を重ねてきました。この場を借りて会員に代わり、私から幹事諸氏に深くお礼を申し上げたいと思う。またその事務処理を的確に担当していただいた、関根裕子、鈴木真有美様に感謝申し上げます。

田島庶務幹事は終始、会長補佐役を務めて下さいました。規約の見直し等、氏の論理的思考が支えとなりました。森 郁恵様から引き継いだ福井渉外庶務幹事は、国際遺伝学大会日本招致実現にむけて検討を積み重ねてこれました。10年近い未来に活躍する世代へ何を語り継ぐべきか腐心する姿がエンジンとなっております。幸い、DDBJの世話などでこの数年国際会議を主催され、多くの知己を海外にもたれる五條堀評議員や前 IGF 会計を担当されました館野会員の協力を得ることができ、少しずつ態勢が整えられつつあります。会員のサポートが一層必要です。斎藤会計幹事には学会の金庫番として一切を切り盛りして頂きました。支出の切り詰めには厳しい姿勢で臨み、たとえ会長といえども、支出申し出を拒絶されることがままありました。研究費・学費をきりつめて寄せられた会費による学会運営を預かる以上、それは当然なことでもあります。特別基金をもうけて、財政基盤の透明化を図られたのは出色の出来栄です。しかし、会員数の減少、機関会員の顕著な減少傾向にどう学会は対応すべきか、会計の頭のない課題です。また斎藤幹事のご努力で学会ホームページが充実してきました。もっとホームページを充実させて、幹事・事務局のみならず会員からの情報提供も随時アップ出来る責任ある受け入れ態勢を構築出来ないか検討を望みます。会員と執行部の間の意思疎通をいかに図るか、就任以来の私のテーマです。編集幹事はまた学会誌を主宰するポストでもあり、編集長と呼ぶことになりました。大会委員長と共に学会を代表するポストです。長い間品川幹事が編集長をしてこれましたが、そろそろどなたかに交代したいと強く望まれましたときは、かなり難問で困りました。かつての会長や知人と慎重に相談を重ね、候補を一人に絞ることが出来ました。編集長たる条件を、個人的な才能、所属する環境等勘案して、決断しました。そして、「突然ですが、遺伝学会誌 GGS の編集の責任者になって下さい。報酬はありません。ボランティアです。事務担当者は一人一定条件で雇用出来ます。予算は年間〇〇です。」まさかの問いかけに遠藤隆京大教授は、即答はされませんでした。しかし現在、名編集長として評判で、良い人事をしたと品川先生からも喜ばれています。表紙も一新しました。内容も徐々に彼の工夫が見えてきま

した。河野前企画集会幹事は、植物学会での貴重な経験をお持ちで、いろいろアドバイスを幹事会でも頂きました。城石幹事に引き継がれて、大会運営に学会本部が責任を負うべき部分と準備委員会の發揮すべき特色あるいは多様さとのバランスをどう図るか、財政的な支援体制と共になお残る課題があるように思われます。高畑幹事には、無理にお願いして新設の幹事を引き受けて下さいました。学会の将来をどう描くべきか、彼の深い造詣に頼りました。具体的には、若手人材育成に関連して、あの適塾に相当した対話集会を構想いただきました。年に1回は、大会とは別に学問の羅針盤となるシンポジウムないしは、遺伝学講演会を公開して頂くよう願っています。

字数も限りが来ました。いい足りないこと、今後に託したい私の言葉は、またこれからの会長日々にて開陳させて頂きます。どなたか作者名は存じ上げませんが、私の好きな俳句を最後に紹介。

「静止して 独楽は木の実に 戻りけり」

◆会 員 異 動◆

新入会・再入会

久保山 勉	300-0393	茨城県稲敷郡阿見町中央3-21-1 茨城大学農学部
田 中 剛	305-8602	茨城県つくば市観音台2-1-2 農業生物資源研究所
石 島 早 苗	305-8566	茨城県つくば市東1-1-1 独立行政法人 産業技術総合研究所
松 田 健 作	812-8582	福岡市東区馬出3-1-1 九州大学大学院 薬学研究院 分子生物薬学分野
野 上 英 起	305-0046	茨城県つくば市
高 橋 一 男	411-8540	静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所
三 浦 郁 生	305-0074	茨城県つくば市高野台3-1-1 理化学研究所 ゲノム科学総合研究センター
春田（高橋）奈美	565-0871	大阪府吹田市山田丘3-1 大阪大学微生物病研究所
岩 下 静 香	338-0823	さいたま市桜区
佐 藤 淳	729-0292	広島県福山市東村町字三蔵985 福山大学 生命工学部 生物工学科
多 田 康 子	560-0043	大阪大学待兼山町1-1 大阪大学理学研究科生物科学専攻
倉 満 恭 子	135-0016	東京都江東区
中 村 淳 子	198-0042	東京都青梅市
呉 宮 恵 理	164-0001	東京都中野区
高 田 豊 行	411-8540	静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所 系統生物研究センター 哺乳動物遺伝研究室
岡 村 英 保	305-8566	茨城県つくば市東1-1-1 中央第6-10 産業技術総合研究所 つくばセンター6-10
川 嶋 剛	305-8566	茨城県つくば市東1-1-1 中央第6-10 (独) 産業技術総合研究所 脳神経情報研究部門 DNA情報科学研究グループ
野 上 悠 佳	606-8173	京都府京都市左京区
西 彗 裕 樹	065-0011	北海道札幌市
小 池 英 明	305-8566	つくば市東1-1-1 つくば中央6-10 産業技術総合研究所
松 崎 邦 彦	338-8570	埼玉県さいたま市桜区下大久保2 5 5 埼玉大学 大学院 理工学研究科 分子生物学専攻
徳 永 一 真	171-8501	東京都豊島区西池袋3-34-1 立教大学理学部生命理学科遺伝学研究室
村 上 佳 奈	171-8501	東京都豊島区西池袋3-34-1 立教大学 理学部 生命理学科
飯 田 充 一	338-8570	埼玉県さいたま市桜区下大久保255 埼玉大学 大学院 理工学研究科 分子生物学専攻

藤 井 智 明	411-8540	静岡県三島市谷田1111 総合研究大学院大学 生命科学研究科 遺伝学専攻
藤 本 祥 恵	338-8570	埼玉県さいたま市桜区下大久保255 埼玉大学理工学研究科分子生物学専攻
山 本 義 治	464-8602	名古屋市千種区不老町 名古屋大学遺伝子実験施設
小 宮 正 明	690-0823	島根県松江市
木 村 亮 介	113-0033	東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院医学系研究科人類遺伝学教室
園 田 和 彦	192-0015	東京都八王子市
西 敏 明	192-0012	東京都八王子市

住 所 変 更

小 幡 一 枝	175-0082	東京都板橋区
手 島 康 介	240-0193	神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村） 総合研究大学院大学
山 口 貴 大	444-8585	愛知県岡崎市明大寺町西郷中3 8 番地 基礎生物学研究所
田 口 尚 弘	783-8505	高知県南国市岡豊町小蓮 高知大学大学院黒潮圏海洋科学研究科海洋健康医学講座
森 下 卓		Genome Damage and Stability Centre University of Sussex Falmer, Brighton, East Sussex BN1 9RQ, UK
井 手 聖	444-8585	愛知県岡崎市明大寺町字西郷中38基礎生物学研 基礎生物学研究所 ゲノム動態研究部門

退 会

土屋 大, 足立泰二, 鄭 松林, (独)水産総合研究センター中央水産研究所上田分室, 東邦大学医学メディアセンター
--

休 会

大畑 樹也

以下の会員の名簿に誤りがありましたので、訂正してお詫びいたします。

孫 田 信 一 464-0858 名古屋市千種区千種2丁目22-8-201
(株) バイオセプトジャパン
TEL 052-745-5384 FAX 052-745-5380
E-mail : shinichi.sonta@biocept-japan.com

寄贈図書・交換図書

科学	Vol.76	No.8,9	2006
CHINESE QINGHAI JOURNAL OF ANIMAL AND VETERINARY SCIENCES	Vol.36	No.3	2006
Chinese Journal of APPLIED & ENVIRONMENTAL BIOLOGY	Vol.12	No.3	2006
ACTA SOCIETATIS BOTANICORUM POLONIAE	Vol.75	No.1,2	2006
PROCEEDING OF THE INDIAN NATIONAL SCIENCE ACADEMY	Vol.71,72	No.1	2005 & 2006
統計数理	Vol.54	No.1	2006

(鈴木真有美)

第7回遺伝学談話会・21世紀 COE セミナー

日 時： 平成18年11月28日（火）午後3時より午後5時30分まで（懇親会は午後6時より）

場 所： 九州大学コラボ・ステーションⅠ（病院地区）視聴覚ホール

（懇親会は九州大学コラボ・ステーションⅡ1階コミュニティラウンジ）

講 師： 矢原 徹一（九州大学・理学研究院・生物科学）

テーマ：『植物の繁殖システムの進化遺伝学』

概 要： 植物の花には、雌雄性が分かれているものから、雌雄両性まで、さまざまな性表現が見られる。両性花の場合には、自家受精が行なわれることもしばしばあり、また、自家受精専用の閉鎖花をつける植物もある。さらに、減数分裂を経ずに種子を生産する無性生殖も見られる。一方で、さまざまな色や匂いで昆虫を誘引し、他家受精を行なう植物も少なくない。このような植物の繁殖システムの多様性は、ダーウィンの先駆的研究以来、植物科学や進化生物学における魅力的な研究テーマであり続けてきた。最近の分子生物学的研究技術の進歩によって、このテーマに関して、進化遺伝学的な研究が大きく発展してきた。私の講演では、植物の繁殖システムの多様性を概観したうえで、性表現の分化や昆虫による送粉システムの分化などに関する新しい研究成果を紹介する。

講 師： 中別府雄作（九州大学・生体防御医学研究所）

テーマ：『活性酸素による核酸の化学修飾と様々な遺伝現象』

概 要： 生物にとって、その遺伝情報を担うゲノム DNA を細胞から細胞へ、親から子へと正確に伝え維持することは最も基本的な生物学的機能であるが、ゲノム情報はその複製過程で生じる突然変異により変化する可能性がある。突然変異、すなわちゲノムの可変性は、生物にとって2つの大きな意義を持っている。塩基置換、重複・欠失、組換え、ゲノムの倍化などのゲノムの変化が生物種の多様性を決定し、進化に寄与しているとすれば、突然変異は生物進化の原動力とみなすことができる。一方、このようなゲノムの変化は短期的に見ると個体の存続や子孫の維持の破綻の原因となることが明らかになっている。ゲノム DNA やその前駆体であるヌクレオチドは、酸素呼吸の過程で必然的に発生する活性酸素や生体防御のために生体が能動的に産生する活性酸素によって酸化される危険に常に曝されている。活性酸素に曝された DNA やヌクレオチドは様々な酸化的化学修飾を受けるが、このような酸化損傷は修復・除去されないと突然変異を引き起こすことで細胞のがん化の原因となり、あるいは細胞死を引き起こすことで多くの変性疾患の原因となる様々なゲノム障害を引き起こす。ゲノム障害を被った多細胞生物においては、正常な細胞の機能や組織の恒常性を維持するために細胞増殖の停止とプログラム細胞死の誘導、あるいは細胞の増殖と分化といった細胞運命の緻密な制御が重要であると考えられる。

今回の談話会では、活性酸素による核酸の酸化に起因するゲノムや細胞の障害とその防御機構について我々の研究紹介し、その破綻がもたらす病態である「突然変異」、「発がん」そして「細胞死」の相互の関連について考察する。さらに、「ヒトゲノムの多様性」と「ゲノムの酸化損傷」の関係について最新的话题を提供したい。

* * *

参加資格は特に問いません。談話会は無料ですが、懇談会には参加費（1,000円／人）をいただいております。学生さんは懇談会も無料です。

<アクセス>

最寄駅： 福岡市地下鉄「馬出九大病院前駅」

会場への詳しいアクセスについては <http://www.kyushu-u.ac.jp/map/index.html> の病院地区キャンパスマップを御参照下さい。

連絡問い合わせ先： 九州大学大学院・理学研究院・生物科学部門

館田英典 (tel: 092-726-4577 : e-mail htachscb@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp)。

<講師の紹介>

矢原 徹一

昭和52年 京都大学理学部卒業
昭和57年 京都大学大学院理学研究科中退
昭和58年 東京大学理学部附属植物園助手
昭和62年 東京大学理学部附属植物園日光分園講師
平成3年 東京大学教養学部助教授
平成6年 九州大学理学部教授、
平成12年 九州大学大学院理学研究院教授。
現在、日本生態学会常任全国委員、日本遺伝学会評議員、
日本植物学会理事、日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員
関心のあるテーマ：性の進化、生物多様性の保全

中別府雄作

昭和54年 宮崎大学農学部入学（獣医学科専攻）卒業
昭和59年 九州大学大学院理学研究科博士課程修了
昭和60年 九州大学医学部・生化学第一講座助手
昭和62年 ジョンス・ホプキンス大学医学部
ハワード・ヒューズ医学研究所助手
平成2年 九州大学医学部・生化学第一講座助手
平成4年 九州大学生体防御医学研究所・生化学部門助手
平成9年 九州大学生体防御医学研究所・生化学部門教授
平成13年 九州大学生体防御医学研究所・個体機能制御学部門教授
現在、日本遺伝学会（評議委員）、日本がん分子疫学研究会（幹事）
関心のあるテーマ：

活性酸素による生体障害とその防御機構
—発がんから神経変性まで—

Genes & Genetic Systems 目次

(The Genetics Society of Japan)

Volume 81, Number 4

August 2006

Review article

Sex chromosome-linked genes in plants Sachihiko Matsunaga 219

Full papers

Expression of Germination-Related Enzymes, CspA, CspB, CspC, SleC, and SleM, of *Clostridium perfringens* S40 in the Mother Cell Compartment of Sporulating Cells Atsushi Masayama, Keishi Hamasaki, Kenji Urakami, Seiko Shimamoto, Shiro Kato, Shio Makino, Tohru Yoshimura, Michie Moriyama and Ryuichi Moriyama 227

Characterization of DNA methyltransferase genes in *Brassica rapa* Ryo Fujimoto, Taku Sasaki and Takeshi Nishio 235

Genetic variations in the chloroplast genome and phylogenetic clustering of *Lycoris* species Tada-aki Hori, Akiko Hayashi, Tsuneo Sasanuma and Siro Kurita 243

Complete assignment of structural genes involved in flavonoid biosynthesis influencing bulb color to individual chromosomes of the shallot (*Allium cepa* L.) Shin-ichi Masuzaki, Masayoshi Shigyo and Naoki Yamauchi 255

Molecular cloning and characterization of the mouse Na⁺ sulfate cotransporter gene (*Slc13a4*): structure and expression Paul A. Dawson, Katrina J. Pirlo, Sarah E. Steane, Karl Kunzelmann, Yu Ju Chien and Daniel Markovich 265

Seasonal fluctuation in susceptibility to insecticides within natural populations of *Drosophila melanogaster*. II. Features of genetic variation in susceptibility to organophosphate insecticides within natural populations of *D. melanogaster* Takahiro Miyo, Yuzuru Oguma and Brian Charlesworth 273

Short communications

Chromosome-specific satellite sequences in *Turritis glabra* Akira Kawabe and Shuhei Nasuda 287

The role of UvrD in RecET-mediated illegitimate recombination in *Escherichia coli* Kouya Shiraishi, Yukiho Imai, Shinji Yoshizaki, Toshimasa Tadaki, Yasuyuki Ogata and Hideo Ikeda 291

(GGS 81 (4) より転載)

本誌の発行に関しては平成18年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）をうけているので、ここに付記する。

Genes & Genetic Systems 第81巻4号（付録）
2006年8月25日発行 頒価3,000円（本誌とも）
発行者 石和 貞男・遠藤 隆
印刷所 レタープレス株式会社
Letterpress Co., Ltd. Japan
〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809-5番地
電話 082 (844) 7500
FAX 082 (844) 7800

発行所 日本遺伝学会
Genetics Society of Japan
静岡県三島市谷田1111
国立遺伝学研究所内

学会事務取扱
〒411-8540 静岡県三島市谷田・国立遺伝学研究所内
日本遺伝学会
<http://www.soc.nii.ac.jp/gsj3/index.html>
（電話・FAX 055-981-6736）
（振替口座・00110-7-183404）
加入者名・日本遺伝学会

国内庶務、渉外庶務、会計、企画・集会、将来計画、編集などに関する事務上のお問い合わせは、各担当幹事あてご連絡下さい。

乱丁、落丁はお取替えします。

この冊子に記載してある個人情報については、慎重に取り扱っていただきますようお願いいたします。